

刀剣

が語る

古代国家誕生

資料集

令和元年

日時

12月22日[日]

会場

明治大学アカデミーホール



ごあいさつ

古代歴史文化協議会は、古代歴史文化の研究・活用に関心のある14県で構成し、個々の地域的な研究だけではわかりにくかった日本の大きな古代史の流れを解明することを目的に、平成26年度から共同で調査研究を行っています。

昨年度までは「古墳時代の玉類」をテーマに調査研究を行い、その成果を展覧会や講演会などの形で皆様に広く情報発信してまいりました。今年度からは新たに「古墳時代の刀剣類」をテーマに定めて活動しております。

第4回となる今回の講演会は、このテーマの最初の講演会です。「刀剣が語る古代国家誕生」と題して、古墳時代の刀剣類を手がかりに、古代王権と列島内各地域との関係や、倭国と朝鮮半島との交流について、最新の調査研究状況に触れながら考えてまいります。

本講演会を通じて、皆様の古代の歴史・文化への関心がさらに高まることを願っております。

開催にあたり、共催いただきました明治大学国際日本古代学研究クラスターと、御協力いただきました関係者・関係機関の皆様に、厚く御礼申し上げます。

令和元年12月22日

古代歴史文化協議会
会長 島根県知事 丸山 達也

第4回 古代歴史文化講演会

刀剣が語る古代国家誕生

◆ 13:30 開会あいさつ 建石 徹 (奈良県地域振興部次長)

◆ 13:40~14:50

基調講演 刀剣から読む古代朝鮮と倭

講師 金 宇大 (滋賀県立大学人間文化学部准教授)

〈休憩〉(15分間)

◆ 15:05~17:00

パネルディスカッション

パネラー 金 宇大

若狭 徹

青笹 基史

角正 淳子

黒石 哲夫

松尾 充晶

刀剣が語る 古代国家誕生

(滋賀県立大学人間文化学部准教授)

(明治大学文学部准教授)

(埼玉県立さきたま史跡の博物館学芸員)

(三重県文化振興課主査)

(和歌山県文化遺産課教育企画員)

(島根県古代文化センター専門研究員)

◆ 17:00 閉会あいさつ 石川 日出志

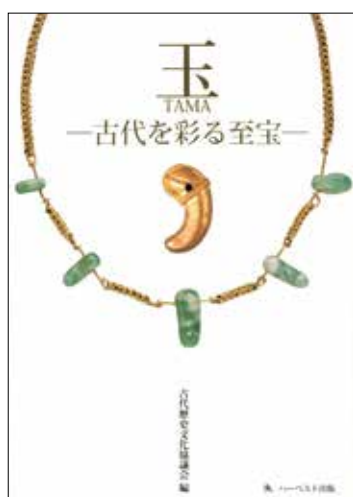
(明治大学文学部教授・明治大学古代学研究所所長)

古代歴史文化協議会とは

古代歴史文化の研究・活用に関心のある14県で構成し、連携して共同調査研究・情報発信をおこなっています。

構成県

埼玉県・石川県・福井県・三重県・兵庫県・奈良県・和歌山県
鳥取県・島根県・岡山県・広島県・福岡県・佐賀県・宮崎県



『玉 - 古代を彩る至宝 -』
研究成果を1冊にまとめた一般向け書籍
ハーベスト出版 定価 1,980円(税込)



協議会ホームページ
14県の玉出土遺跡データベースや、過去の講演会
記録などを掲載しています。

第1期のテーマ「古墳時代の玉類」の研究成果は、書籍やホームページを通して情報発信しています。



協議会 HP

共同調査研究テーマ「古墳時代の刀剣類」のねらい

刀剣類は古墳時代の副葬品として普遍的で全国で大量に出土していますが、その数が多いに膨大で多種に及ぶことから、網羅的な研究が十分におこなわれていません。そこで当協議会では、個別地域の枠を超え、広い視野で刀剣類の総合的研究を進めてまいります。

日本で弥生時代に登場する初期の鉄製刀剣類は、中国からもたらされたものと考えられています。また、古墳文化を象徴する金銀で飾った装飾付大刀もまた、三国時代の朝鮮半島各地域との密接な交渉を物語っています。このように刀剣類の研究は、広く東アジアにまたがるダイナミックな交流を読み解く手がかりになるでしょう。また、刀剣類は武力・権力を象徴する品であり、所有する人物の軍事的権能や、権力構造と密接にかかわる器財と考えられてきました。刀剣類の生産～所有に至る各地の様相を明らかにすることで、形成過程にある国家の実像をリアルに描き出すことができると期待されます。

基調講演 「刀剣から読む古代朝鮮と倭」



きむ うだい
金 宇大

(滋賀県立大学人間文化学部 准教授)

1. 古墳時代の多様な「装飾付大刀」とその意義

古墳時代の社会は、一般的なイメージに比して、ずっと高度で複雑である。この時代に日本全国で築かれた古墳は、10数万基を超える。そのうちの数千基は、円形の墳丘に方形の突出部が取りついた「前方後円墳」の形態をとる。この巨大な、鍵穴のような形状をした特異な墳丘墓が、北は岩手、南は鹿児島にまで、実に広範に分布している。こうした事実は、とりもなおさず、古墳時代社会に強大な権力機構が存在したことを示唆する。

文献史料の少ない当時の社会様相を、いかに復元するか。その重要な糸口の一つが、「刀剣」である。特に、古墳時代の後半から出土する、貴金属で装飾を施した「装飾付大刀」（「装飾大刀」、「飾大刀」とも）は、当時の社会の実態をうかがい知る上で、非常に有力な手がかりとなる。古墳時代の特に後期、6世紀代を中心に、日本列島では多種多様な装飾付大刀が流通した。種々の装飾意匠をあしらったこれらの刀には、古墳時代の日本で伝統的につくられてきた木や鹿角の刀剣装具を発展させたものもあれば、中国や朝鮮半島へとその系譜を追うことができるものもある。様々な来歴を経て生まれた各種の装飾付大刀が、ある一時期に共存しつつ日本全国に大量流通した背景には、どのような意味があるのか。

本講演では、装飾付大刀をめぐる諸問題の中でも、朝鮮半島の各地から日本へと伝わったいわゆる「外来系装飾付大刀」に焦点を当て、古墳時代社会の対外関係の問題を大刀から読み解いてみたい。特に、環の中に龍ないし鳳凰をあしらった「単龍・単鳳環頭大刀」に着目し、実物の観察調査を通じた微細な製作痕跡の分析から製作工程を復元・比較することで、日本列島における大刀製作工人の系譜に迫る。

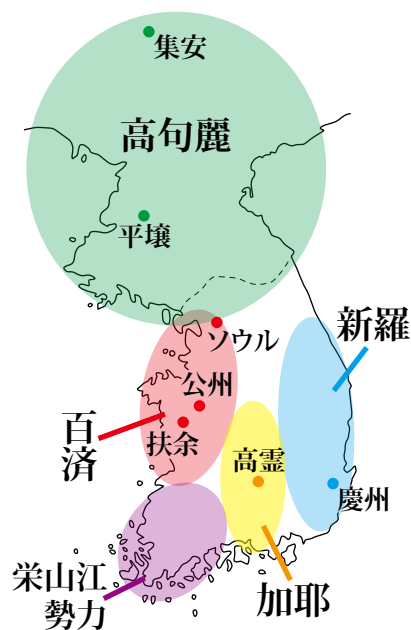


図1 三国時代の朝鮮半島

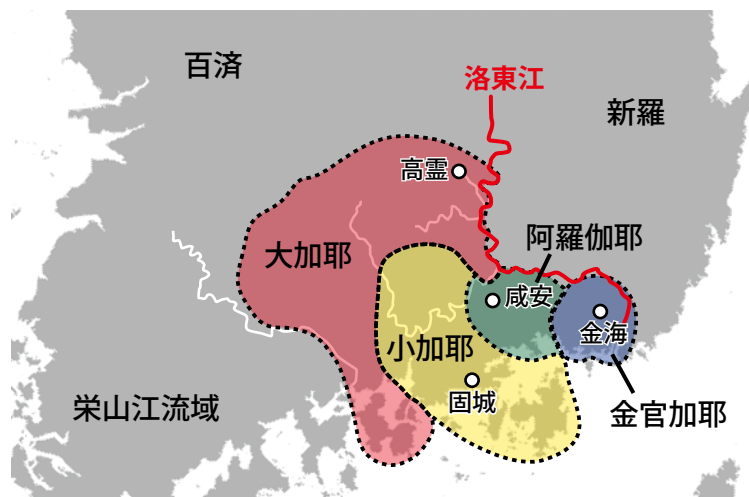


図2 加耶のおおまかな地理的範囲

2. 半島各地の装飾付大刀と日本列島への流入

古墳時代当時の朝鮮半島は、いわゆる「三国時代」にあたる。高句麗、百濟、新羅に加え、金官加耶や大加耶といった加耶諸国、西南部の榮山江流域の勢力など、大小様々な権力集団がこれを割拠していた（図1）。日本列島の在り方と異なるのは、装飾付大刀を含む各種金工装飾品の意匠的特徴が、地域ごとに明確な独自性を示すことである。このことは、容易に製作することのできない華美な金工装飾品を、それぞれの権力中枢が独自につくりだし、地方の有力勢力に配布することで、地方を間接的に統治するための媒介物にしたためと考えられている。中でも、冠や帯金具、耳飾といった金工装身具は、いわゆる「威信財」（韓国語では「威勢品」という）と呼ばれるもので、装飾付大刀もその装身具セットの一部をなすものとして賜与された。

朝鮮半島の装飾付大刀は、5世紀代の墳墓を中心に出土する。いずれの地域でも、柄のグリップエンドに環状の装飾部を付加した「環頭大刀」が装飾付大刀の大部分を占めるが、その文様や細部の装飾の特徴は地域ごとに異なる。例えば、新羅の圏域内では、カマボコ形の環の中に三つ葉の植物文を配した「三葉環頭大刀」や、C字形の環を三つ重ねた「三累環頭大刀」が流通した。他方、百濟では、環の内部に龍や鳳凰を象った「龍鳳文環頭大刀」や、鉄製の環上に銀線や金線で文様を表現した象嵌装の環頭大刀が多い。加耶諸国の一つ、大加耶でも、龍鳳文環頭大刀が多数確認されているが、その文様や装飾細部の特徴は、百濟のそれとは異なる。

先述したように、日本列島で各種装飾付大刀の製作が本格化するのは6世紀代、それも後半に入ってからであるが、5世紀代以前の日本でも断片的に鉄以外の金属を用いた装飾付大刀が出土する。この段階の装飾付大刀はいずれも環頭大刀であり、朝鮮半島の各地から舶載されたものとみてよい。最も早い時期のものは、5世紀前半代に確認される、シンプルな三累環頭大刀や素環頭大刀である。福岡県埴輪町1号墳や香川県原間6号墳で出土した三累環頭大刀（図3-1）は、環の断面が扇形を呈するという特徴をもち、釜山福泉洞8号墳例（図3-2）や同10・11号墳例など、朝鮮半島に直接的な類例を認めることができる。これらの三累環頭大刀をもたらした交渉主体については、釜山の福泉洞集団であったか、その背後の新羅の意図であったのかは諸説あるが、同様の三葉環頭大刀が蔚山や大邱においても出土している点を評価すると、後者であった可能性が高いと考える。

兵庫県宮山古墳第2主体で出土した「銀鍍金貼環頭大刀」は、環内に蕾状の装飾を配した、国内外で類例のない特異な装飾付大刀である。その細部を観察すると、透かし装飾をもつ銀板を被せる、外環に象嵌による唐草文様を配して文様のない余白部分を一段低くつくりだし、そこに薄い金板を貼り

付ける、など、極めて緻密な技術で装飾が施されていることがわかる。特に、上述の金板を貼付する技法をより詳細に検討すると、表面に多数の小孔を穿って表面を荒らし、その凹凸に金板を押し付けることで圧着させてある（図4）。これらの技法上の特徴は、天安龍院里1号石槨墓出土例や同12号石槨墓例など、百濟圏域で認められる。宮山古墳刀は、百濟からもたらされたものとみてよいだろう。宮山古墳刀を含め、5世紀後半になると、百濟との関わりの中で搬入されたとみられる大刀が散見するようになる。一方で、新羅からの大刀の流入は、この時期には認められな



図3 5世紀代の三累環頭大刀
1. 香川・原間6号墳、2. 釜山・福泉洞8号墳



図4 大刀外環に施された金板圧着装飾
左. 兵庫・宮山古墳、右. 天守・龍院里1号石槨墓

い。

6世紀に入ると、新羅からの大刀が再びみられるようになる一方で、大加耶系の大刀も認められるようになる。例えば、滋賀県鴨稻荷山古墳の双鳳環頭大刀(図5-2)は、はぶちよん 陝川玉田M3号墳などで出土する大加耶の龍鳳文環頭大刀の類例として位置付け得るものである。岡山県きんけいつか金鶏塚古墳や栃木県おのすね小野巢根1号墳で出土した上円下方形の銀装素環頭大刀(図5-1)も、大加耶に系譜を求め得る。このように、古墳時代後期以後は、朝鮮半島南部の各地域の大刀が搬入されており、その様相が複雑化する。ただし、6世紀前半代までにみられるこれらの外来系大刀は、出土数が少なく、いずれも日本列島で製作されたものとは考えがたい。



図5 大加耶から搬入された装飾付環頭大刀
1. 栃木・小野巢根1号墳、2. 滋賀・鴨稻荷山古墳
Image:TNM Image Archives

その一方、5世紀後葉頃には、古墳時代前期以来の木装ないし鹿角装の刀剣装具を発展させた「倭装」の装飾付大刀が出現する。振りを加えた半円形の棒状部品を柄頭に付した「振り環頭大刀」と呼ばれる大刀に代表される。その大きな特徴として、刀の長大化を挙げることができる。大きなものでは刀身の長さが1mを超えており、およそ実用には向かない。このことは、単に刀の装飾化が進んだのではなく、ぎじょう儀仗用あるいは象徴物としての性格を刀が備えるに至ったことを示している。この「倭装大刀」の出現という現象を、5世紀代を通じた朝鮮半島各地からの装飾付環頭大刀の流入とどれほど関連付けられるかは、明確に判断しがたい。しかし、5世紀後葉以降の古墳時代社会で、刀が単なる武器としての意味を超えた存在として認識されはじめたことは確かであろう。

3. 日本列島での装飾付大刀製作の定着と拡大

6世紀後半に入ると、上述の伝統的な倭装大刀に加えて、各種の装飾付大刀の日本列島内での製作が開始される。このうち、「単龍・単鳳環頭大刀」は、中国・朝鮮半島に源流をもつ「外来系」環頭大刀の中でも、最も早くに日本列島に定着した大刀である。出土地が不確かなものも含めると、200

例近い事例が知られており、主要な大刀形式の一つといえる。環内および外環には、躍動感のある龍や鳳凰が精緻に表現されているが、これらの文様は、時期が下るにつれ次第に形骸化していく（図6）ことが指摘されている（新納 1982）。大陸に起源を発する龍の概念が、日本列島で製作にあたった工人らにうまく継承されず、龍の細部の理解が及ばなくなっていくためと考えられる。

単龍・単鳳環頭大刀の文様を比較したとき、最も文様が崩れていない、すなわち最も古い製作品と考えられているのが、韓国の公州武寧王陵で出土した大刀である（図7）。武寧王陵は、1971年に偶然発見された未盗掘墳で、中国南朝でみられる塼室墓を採用している。墓誌が出土しており、523年に没した第25代百濟王およびその妃の墓であることが明らかとなった。発見された単龍環頭大刀は、すでに多数の発掘事例が知られていた日本の単龍環頭大刀のプロトタイプに位置付け得る精緻な龍文をもち、大きな注目を集めた。以降、日本の単龍・単鳳環頭大刀は、百濟との交流の中で、伝えられたものであるとの認識が一般化した。

ところが、近年の研究で、日本列島で出土する初期の単龍環頭大刀が、必ずしも武寧王陵刀と直接比較し得るものでない可能性が浮上している。武寧王陵刀は、環頭部の金色を、「鍍金」によって発色させている。鍍金とは、水銀に金を溶かしたもの（金アマルガム）を塗布したのち、加熱して水銀を蒸散させることで、金を定着させる手法である。一方、日本列島の初期単龍環頭大刀、大阪府海北塚古墳例や岡山県岩田14号墳例、大阪府一須賀WA1号墳例などは、環内の龍首のみに鍍金を施し、外環は薄い金板を被せて仕上げる。つまり、両者の外環の装飾方法に差異が認められるのである。日本列島の単龍・単鳳環頭大刀で、全体を鍍金で仕上げる資料が出現するのは、文様の型式学的組列からみて、やや新しい段階に入った後である。

さらに、初期の単龍環頭大刀の細部を詳しく観察してみよう。外環に金板を被せた初期単龍環頭大刀は、いずれも外環側面の中央付近に、環の並行方向へ龍文の凹凸を横断して走る直線状の痕跡が断片的に確認される（図8）。この痕跡は、一見すると、合わせ鑄型により鑄造した際、鑄型の合わ

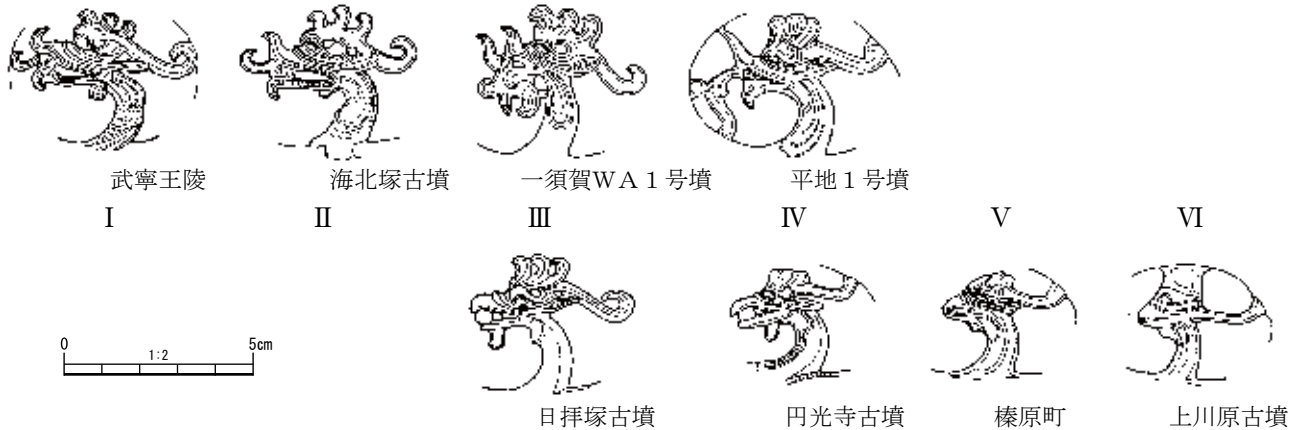


図6 単龍・単鳳環頭大刀の型式学的変遷



図7 公州武寧王陵出土の単龍環頭大刀



図8 単龍環頭大刀の外環にみられる線状痕跡と比較資料
1. 岡山・岩田 14 号墳、2. 公州・武寧王陵、3. 陝川・玉田 M3 号墳

せ部に生じる型割り線 (= parting line) のようにみえる。しかし、例えば岩田 14 号墳例の龍首の付け根にあしらわれた雲気文^{うんきもん}を観察すると、表裏両面で雲気が伸び、それぞれの雲気の間「空隙」があることがわかる (図9)。このような内側に空隙を有する構造は、鑄型の内部に溶けた金属を充填する合わせ鑄型の手法では製作できないはずである。

武寧王陵の大刀も、龍首の耳が表裏両面でそれぞれ伸び、岩田 14 号墳例のような内側に空隙を有する構造をもつ。同刀の製作技法については、蠟原型を用いた「失蠟法」^{しつろうほう}による製作を想定する研究がある (李漢祥 2006)。すなわち、蠟原型に粘土を貼り付け、熱して粘土を焼き上げるとともに中の蠟を溶かし出し、これを除去した空洞に溶かした金属を流し入れることで蠟原型と同じ形の鑄物を得るという方法 (図 10) である。この方法ならば、複雑な立体構造をもつ製品を鑄造することができる。ところが、武寧王陵の大刀の外環側面には、日本の初期単龍環頭大刀にみられるような線状痕跡は認められない。



図9 岩田 14 号墳刀の「雲気」の意匠

金跳咏氏は、複雑な立体構造を有しつつ外環側面に線状痕跡を残す環頭大刀が、「間接的な失蠟法」によって製作されたものではないかと推定した。この方法では、鑄造のための蠟原型をつくるにあたって、蠟材を直接加工するのではなく、まず木や金属といった別素材で一次原型を製作する。完成した一次原型を寒天のようなもので包むようにして固め、刀子などで切り開いて中の一次原型を取り出すと、「蠟原型作成用の型」ができる。そこへ溶かした蠟を流し込んで冷却し、蠟原型をつくる。あとは通常の失蠟法と同じ工程を経て、製品を完成させる (図 11)。この工程で製作すると、一次原型を取り出すために切り開いた「蠟原型作成用の型」の合わせ目に、合わせ鑄型を用いたような

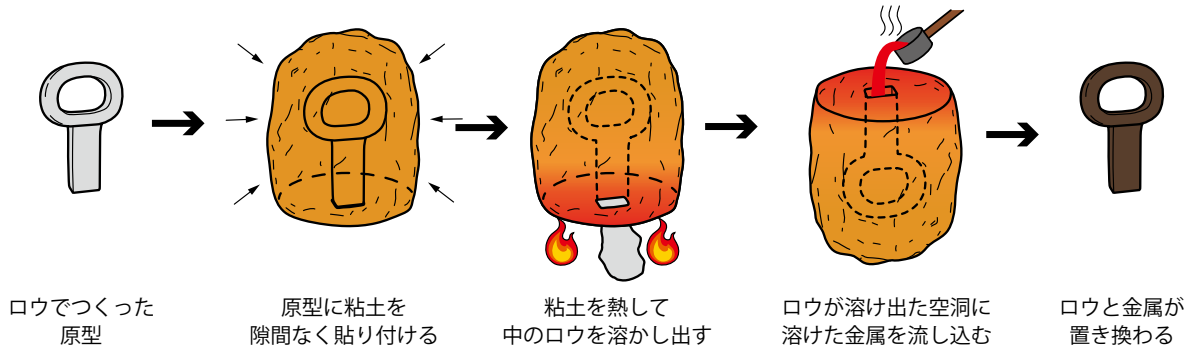


図 10 直接失蠟法による鑄造工程の模式図

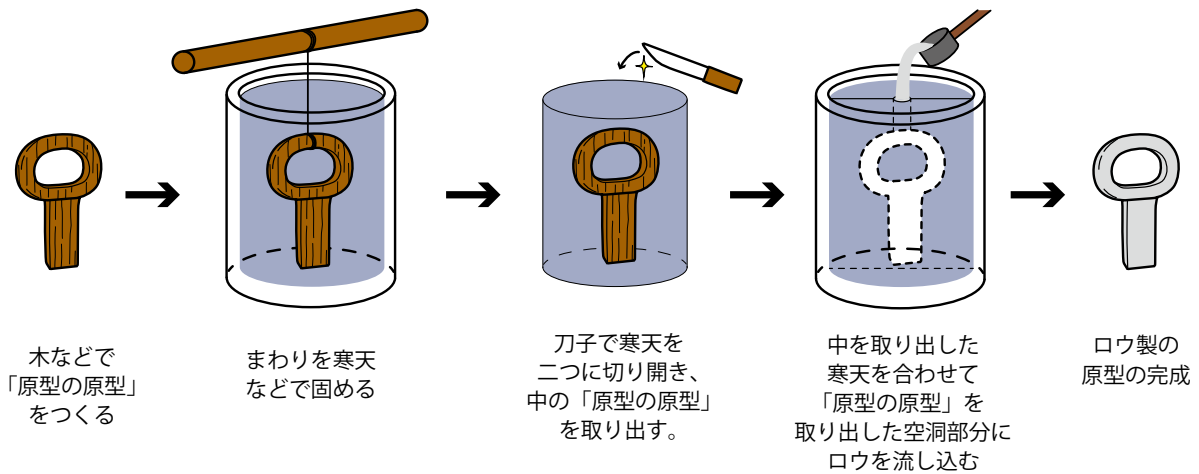


図 11 蠟型を「鑄造」する工程の模式図

型割り線が生じるのである。金氏は、上のように推定した「間接失蠟法」で実際に製作実験をおこない、復元した資料の外環側面に実物資料と同様の線状痕跡が生じることを確認している（金跳咏 2013）。この推定が正しいということになれば、日本の初期単龍環頭大刀は、直接失蠟法での製作が見込まれる武寧王陵の大刀とは、鍍金の範囲のみならず、基本的な鑄造工程において製作技法が異なる、ということになる。

では、間接失蠟法により製作されたとみられる大刀は、日本列島にしか存在しないのか。実は、同様の線状痕跡を外環に残す資料が、朝鮮半島南部で出土している。高霊^{こりよん}を中心地とする加耶諸国の一つ、「大加耶」とされる地域でまとまって出土する龍鳳文環頭大刀である。5世紀末から6世紀前半を中心に、大加耶の圏域内で流通した大刀で、先に述べたように、武寧王陵刀や日本列島の単龍・単鳳環頭大刀とは、その文様表現が大きく異なる。大加耶系龍鳳文環頭大刀は、外環の素材が鉄製のものが大部分を占め、鍍金を用いずに金板を被せて仕上げる。それらの外環細部を観察すると、陝川玉田古墳群での出土例をはじめ、大部分の資料で件の線状痕跡を視認できる（図 8-3）。文様の凹凸を横断して直線的に伸びる痕跡の在り方からみて、大加耶の龍鳳文環頭大刀も、日本列島の初期単龍環頭大刀と同様の間接失蠟法により製作されたと判断される。つまり、日本列島の初期単龍環頭大刀は、百濟的な文様をもちつつ、大加耶の製作技法でつくられたもの、ということになる。

上述したように、単龍・単鳳環頭大刀の副葬が日本列島ではじまるのは陶邑編年 TK43 型式期以降、6世紀後葉に入ってからである。単龍・単鳳環頭大刀の製作時期については、日本列島出土例と武寧王陵刀との文様の型式学的連続性から、武寧王の没年である 523 年を大きくは下らないものと考えられていた。そのため、日本の初期単龍環頭大刀は、一定の保有期間を経てから TK43 型式期に至っ

て一斉に墓への副葬がはじまったものと理解されてきた。しかし、今回の検討で、武寧王陵刀と日本の初期単龍環頭大刀は、龍文の特徴に高い類似性が認められる反面、製作技法面では連続性をもたないことが明らかとなった。その結果、武寧王陵刀に引き付けて日本の単龍環頭大刀の製作年代を遡及させる必要はなくなった。TK43 型式期を遡る副葬事例を積極的に見出しがたいのであれば、それらの製作開始年代についても6世紀中葉以降とするのが自然な解釈であろう。

このことを踏まえ、『三国史記』の大加耶滅亡に関する記述に注目してみたい。記事によれば、大加耶は562年に新羅に併合され、滅亡したとされる。この年代は、先に推定した日本列島の単龍環頭大刀の製作開始時期に近接する。つまり、大加耶系の技術でつくられたと目される日本列島の単龍環頭大刀が、大加耶の滅亡を前後する時期、あるいはそれ以後に製作されたものである可能性が高いということになる。

そこで、次のような解釈を提起してみたい。すなわち、日本出土の単龍・単鳳環頭大刀は、大加耶の滅亡後に大加耶から渡来した工人集団によって製作されたものだとする理解である。倭王権は、大加耶の滅亡にともなって流出した大刀工人集団を受け入れ、列島内の工房を整備、日本列島での単龍環頭大刀製作を開始した。ただし、倭王権は大加耶風の大刀でなく、百済風の大刀の製作を要請した。そのため、武寧王陵の大刀に酷似した龍首をもつ大刀がつけられたが、その製作工程は、大加耶の龍鳳文環頭大刀を製作する際の技術を応用したものであった。

上のような推定が正しいとすれば、日本列島での単龍・単鳳環頭大刀製作開始の直接的な要因は、百済との交流よりも、大加耶の滅亡という朝鮮半島の情勢変化であったということになる。もちろん、百済の単龍環頭大刀との文様の高い類似性は、大刀製作において百済工人の関わりが皆無ではない可能性を強く示唆している。当時、百済との工人レベルの交流は、少なからずあったであろう。しかし、その製作の主体を担ったのが大加耶系の工人であったことは間違いない。このことから読み取れるのは、倭における先進的な技術や知識の導入が、専ら百済に依存するのではなく、半島の様々な地域を視野に入れつつ多元的に展開されていたということである。

4. 半島系文物のさらなる系譜検討

以上、単龍・単鳳環頭大刀の製作開始の契機を、大加耶との関わりから解釈した。古墳時代後期になると、伝統的な倭装大刀の生産が拡大され、象徴物としての装飾付大刀への社会的需要が高まりをみせる。そうした機運の中、単龍・単鳳環頭大刀の生産が新たに開始され、日本全国に流通した。その「新しい大刀」として「外来系」の意匠が導入された背景には、半島系の文物・技術の流入がとりわけ活発化した、古墳時代後期の社会状況が関係しているとみられる。

陶邑編年 MT85～TK43 型式期、6世紀後半は、装飾馬具や装飾付大刀など、いわゆる「半島系文物」が特に多く出土する。この現象は「舶載品ラッシュ」とも呼ばれており（内山2012）、古墳時代を通じて最も朝鮮半島との交流が緊密化した時期と評価されている。朝鮮半島各地との関係の深化が、この時期の社会の成長を強く促したことをうかがえる。ここで重要なことは、数多く出土するこれらの「半島系」考古資料が、具体的に朝鮮半島のどの地域との関わりで理解できるものなのか、その系譜の正確な把握に努めることであると考えられる。ある資料の系譜について、その源流を求められるのが百済なのか新羅なのか、朝鮮半島から舶載されたものなのか、日本列島で渡来工人が製作したものなのか、そうした認識が動くとき、歴史解釈も全く異なるものになってくる。本講演での検討で、すでに文様や装飾意匠の類似性からある程度の系譜が推定されている資料についても、製作技法の詳細な比較検討によって、系譜や製作地に関する新たな知見が得られる可能性があることが明らかとなった。

とすれば、他の半島系資料についても、改めてその系譜を検討し直して見る必要がある。特に、古墳時代社会において特別な意味を有した各種「刀剣」の系譜的検討は、まさに急務といえよう。

【主要参考文献】

- 李漢祥 2006 「武寧王의 環頭大刀」『武寧王陵出土遺物分析報告書(Ⅱ)』国立公州博物館 pp.10-49
 内山敏行 2012 「裝飾付武器・馬具の受容と展開」『馬越長火塚古墳群』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第120集 豊橋市教育委員会教育部美術博物館 pp.313-324
 金宇大 2017 『金工品から読む古代朝鮮と倭——新しい地域関係史へ』プリミエ・コレクション79 京都大学学術出版会
 金跳咏(小谷地肇・鈴木勉・金宇大 訳) 2013 「大加耶龍鳳文環頭大刀の外環製作方法と復元実験」『文化財と技術』第5号 工芸文化研究所 pp.43-53
 高田貫太 2017 『海の向こうから見た倭国』講談社現代新書2414 講談社
 新納泉 1982 「単龍・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 史学研究会 pp.110-141

【図の出典(資料所蔵機関)】(記載のないものは筆者作成)

- 図2：高田2017を改変
 図3-1：筆者撮影(香川県埋蔵文化財センター)
 図3-2：筆者撮影(東亜大学校博物館)
 図4-1：筆者撮影(姫路市教育委員会)
 図4-2：筆者撮影(国立公州博物館)
 図5-1：筆者撮影(栃木市教育委員会)
 図5-2：東京国立博物館提供
 図6：新納1982を改変
 図7：李漢祥2006より引用
 図8-1：筆者撮影(赤磐市山陽郷土資料館)
 図8-2：筆者撮影(国立公州博物館)
 図8-3：筆者撮影(国立中央博物館)
 図9：筆者撮影(赤磐市山陽郷土資料館)

「東国首長の地域経営と装飾付大刀の意義」



わかさとおる
若狭 徹

(明治大学文学部 准教授)

はじめに

本シンポジウムでは、主として華麗な装飾付大刀の在り方から、古墳時代後期の倭における地域の動態が語られることになる。そこで本稿では、筆者のこれまでの地域研究（若狭 2017・2018）を踏まえて、まず東国首長が古墳前期からどのような地域形成の過程を歩んだかを示す。その後、古墳後期の刀剣を中心とした器物ならびに墳墓の状況から、東国と王権の関係性を素描したい。

1. 東国古墳時代の地域形成過程

(1) 低地開発と交通ネットワーク

筆者がフィールドとする群馬県地域（上毛野^{かみつけぬ}）を核としてモデルを示す。

まず、弥生時代末から古墳時代前期にかけて、東海・北陸からの大規模な集団移動が関東・東北南部を席卷した（図1）。近年の研究から、多雨化などを背景とした環境難民の発生であったと考えられる（中塚 2015 など）。移動してきた集団固有の技術により、低湿地開発が進展。東国各地に中小の河川水利に依拠した首長が勃興した。玉突き現象で南関東の集団が北方に拡散し、東関東と東北地方南部の地域形成が促された。

多くの地域で、第一世代首長が前方後円墳を採用し、その後、倭王権との関係の強さによって前方後円墳が採用されていった（当初から前方後円墳の地域もある）。規模は多様だが、墳長 100 m を越えるものも多くみられ、最大は 130 m 級である（図2）。

集団移動は物流と情報ネットワークの変革ももたらした。とくに舟運（海上・河川）による流通システムが構築された。津の所在地には市が立ち、それを監督する首長が力をもったと推定される（北條 2017）。

(2) 王権との関係強化

前期後半には、大和の佐紀古墳群を営んだ王権との関係が深まる。佐紀陵山型の墳形、埴輪、石製模造品の採用などが進む。上毛野・甲斐・陸奥で 170 m 近い前方後円墳が出現する。

上毛野東部では、水源地に水の祭祀施設を備えた大型居館（中溝深町遺跡）が営まれ、広域水利圏を調停する大首長が登場したことを教える（165 m の別所茶臼山古墳が対応する）。また、甲斐の古墳（甲斐銚子塚古墳 169 m）は太平洋岸と日本海側の交通結節点に、上毛野西部の古墳（浅間山古墳^{せんげんやま} 172 m）は利根川・荒川水運の最上流部に、陸奥の古墳（雷神山古墳^{らいじんやま} 168 m）は太平洋岸の津に所在し、王権や西日本とつながる長大な交通ネットワークの要衝を押さえる。列島各地に海浜型前方後円墳（広瀬 2015）が成立し、交易網の安全保障体制が確立したことを推定させる。

(3) 共立王と対外交流

中期前半の上毛野には、長持形石棺を許された墳長 210 m の巨大前方後円墳・太田天神山古墳^{おた てんじんやま}が成立した。ただし、専制首長の登場ではない。同古墳の後には巨大前方後円墳は続かず、再び 100 m クラスの前方後円墳が並立する様態に戻るからである（図2）。天神山古墳被葬者は、一過的に選ばれた共立王（土生田 2008）だと考えられる。

古墳の分布からみたその共立エリアは、既存の水利圏（経済圏）を超越した上毛野全体から北武蔵に及び、これまでにない利害関係に拠って連合したことが重要である。この時期以降、毛野をはじめ

東国各所で渡来文物が出土し始める。このため筆者は、東国豪族が王権の委任を受け、大陸・朝鮮半島との対外活動を始めるにあたり、代表権をもつ人物（天神山古墳被葬者）を選任したと推測している。まさに、倭の五王の時期にあたる。

当時、西日本では渡来技術の獲得が進み、東国の各地域もそれを渴望していたとみられる。共立王の選任は、渡来人を獲得しようという東国首長らの利益共同体の産物であった。ゆえに、海外とのネットワークが得られ、各首長配下に渡来人が編成されるや、その結合は分解したと考えられる。

なお、「日本書紀」には、神功・応神・仁徳紀に上毛野氏の祖先たちによる複数回の訪韓（将軍・外交特使として活動）と四邑の民を連れ帰ったとの伝承を載せている。

共立王の選任の動きは、東国の各所に興った。常陸の舟塚山古墳（186 m）、上総の内裏塚古墳（144 m）などがそうであろう。常陸国風土記には、行方郡の古津比古の訪韓伝承を載せる。また、内陸勢力が船での行動を行う際には、沿岸勢力との共同が必須である。内裏塚古墳など内房地域の活性化は、内陸と結ぶことによって惹起されたとみられる。

（4）渡来技術を背景とした地域開発

そうして獲得された渡来人を配下に編成して、小地域ごとに急速な地域形成が進んだ。上毛野では、渡来人の墓制として方形積石塚が広く営まれており、規模と構造から3段階以上の階層構造がみられる。在地で韓式系軟質土器も製作され、かなりの人数の渡来第1世代が存在したことがわかる。20 m規模の積石塚もあることから渡来人指導者層がいたと考えられる。

渡来人の技術力を基盤として、首長らは経済成長を競った。その代表は、首長居館三ツ寺I遺跡とその奥津城の保渡田古墳群を造営した勢力である。基盤となった榛名山南麓一帯の研究から、地域経営の諸相が明らかになっている。この首長は、地域経営拠点を新開地に置き、①広域水利網の確立による水田経営の刷新、②高燥地での大規模な畑作、③各種手工業生産の推進（鉄・須恵器・埴輪・紡織）、④馬生産の始動、など複合的な経営を推し進めた（図3・4）。

また、同じく榛名山麓の金井東裏遺跡からは、小札甲を着たまま火山災害に倒れた首長が検出され、一帯で馬生産や金属加工が進められていたことが分かった。首長は渡来形質の移住者であることが理化学的に推定されており、地位上昇した渡来系人物が地域形成に参画していたことも分かった。同様の地域形成は、列島各地で進められたことが明らかである。雄略朝とその前後にあたる。

2. 東国古墳時代の独自の動き

（1）継体朝の再編

雄略朝は、初源的な官僚制である「人制」や、銘文刀剣にみる上番制の成立など、中国南朝への上表文に書き込まれたような専制的性格が顕著である。しかし、それはそのまま国家形成には進まず、6世紀前半には王統が転換する継体朝（北陸から迎えられたとされる継体大王の治世）を迎える。

上毛野では主勢力が榛名山大噴火による被害で衰微し、南部の七輿山古墳（150 m）の被葬者が共立された。七輿山古墳は、継体の真陵と目される大阪府今城塚古墳（181 m）、継体の妃を出した尾張氏の墓とみられる愛知県断夫山古墳（150 m）と墳形が共通し、後期前半の倭の前方後円墳のトップスリーに入る（図5）。七輿山古墳の被葬者をはじめとする東国首長も、継体の擁立に関わった可能性が濃厚であろう。

（2）屯倉の設置と東国の独自性

継体の晩年に九州で筑紫君磐井の乱がおこった（磐井墓は福岡県岩戸山古墳に比定。図5）。継体朝の内政と半島情勢をめぐる軋轢が噴出したものであり、その混乱の解消過程で欽明朝の政治改革が

進んだ。国造制、屯倉や名代の設置、部民制の導入、氏族の確立などである。

東国では武蔵国造の争いが記録される。武蔵の首長の内紛に上毛野の首長と王権が関与した事件で、決着後に屯倉が設置される(「日本書紀」安閑紀)。筆者は、継体没後に東国最大勢力(七輿山古墳被葬者)を解体させた事件だったと考えている。七輿山古墳膝下の領域はその後に60m級前方後円墳を築造する4ブロックに分立しており、ここに複数の屯倉の設置(緑野屯倉・佐野屯倉)が確認できる(図7)。上毛野では、60m級前方後円墳は屯倉管掌者のランクに相当することが分かる。

一方、上毛野には、より大きな100m級前方後円墳も点在するが、これらは後の評督(郡領)層に相当する(図7)。このクラスの墓には、朝鮮半島系文物(一部北朝文物)が多数副葬されており、対外活動への濃厚な関与が考えられる(内山2011)。なお、武蔵や上総では渡来人を象った埴輪も知られる。100mクラスの被葬者の中から国造が選任され(上毛野国造)、榛名山東南麓の総社古墳群の勢力が国造に任じられたと考えられる(白石1996)。

西日本では、この頃から前方後円墳の造営が下火になり(円墳化し)、諸豪族の官僚化が進んだことがわかる(図6)。東国では(150mにおよぶ前方後円墳はもはや現れないが)、西日本とは異なって、前方後円墳の築造が急激に活発化する。この時期の倭の大型前方後円墳の大半は関東に造られ、形象埴輪も独自に展開する。また、上毛野を中心に、馬具・小札甲・装飾付大刀が多数出土し、倭で最も集中する(松尾2011・図9、内山2011・図10、徳江2011・図13)。今回のディスカッションはこの時期が焦点となる。

3. 刀剣と国家の関係

(1) 朝鮮半島の装飾付刀剣

金宇大によると、朝鮮半島の新羅においては、5世紀中頃になると装飾付大刀の意匠が統一され、政権中枢による製作・配布の管理が徹底され、政治的アイテムとして国内秩序の形成に役立ったとされる。続いて505年に州郡制が施行されて国家体制が整うと、金工品は低調となるが、周縁地域(昌寧など)には配布が継続したという。

5世紀後半には百済の首都漢城の陥落(475年)を受けて、百済工人が一部大伽耶に吸収され、同地での耳飾りや装飾付大刀の製作が隆盛。それらは倭への戦略ツールとして活用されたという。さらに大伽耶が新羅によって562年に滅ぼされると、工人が倭に渡来し、6世紀後半には装飾付大刀の国産化が一気に進んだ。各種大刀は、倭の身分表徴システム確立のツールとして目的的に製作・配布されたと考察される(金2017)。

(2) 倭における装飾付大刀

装飾付大刀は6世紀後半に国産化され、多様化を遂げた(各種環頭大刀、円頭大刀、圭頭大刀、頭椎大刀)。伝統的な倭系の大刀もその影響下で加飾が進んだ。

金色に輝く華麗な環頭大刀などには目を奪われるが、しかし、王族墓とされる奈良県藤ノ木古墳の棺内副葬に選ばれたのは倭装の大刀であった。同様に、東国で6世紀後半に大流行した大刀形埴輪はいずれも倭装大刀がモデルである。ゆえに、権威性や神聖性は倭装大刀に備わり、装飾付大刀は違った性格を帯びていたと思われる。

先学は、装飾付大刀は軍事面での格付けを体現するものと捉え(町田1976)、軍事に従った国造や舎人への配布品と性格づけた(新納1983など)。配布元としては、中央氏族(大伴・物部・蘇我氏ら)が工人を配下に置き、それぞれが独自の形式の大刀を製作し、関係する地方氏族に分配したと説明される(新納2001、豊島2017など)。

中央氏族が倭王権の用務を分掌する当時の体制下では、屯倉の経営や舎人の出仕などに伴う中央と地方の関係形成の中で、大刀がそのように扱われた可能性は高いと考えられる。大刀が集中する出雲と東三河では、大刀の形式差が明快に分かれ、配布元と在地勢力の関係が鮮明だとされる（松尾 2005）。

こうした多様な大刀は 7 世紀前半で収束し、7 世紀後半には定型化した方頭大刀に絞り込まれ、国営工房で一元製作されたとみられる。大化改新、評制施行などの本格的な国家体制への胎動期と重なってくる。

（3）東国の装飾付大刀

先述のとおり、6 世紀後半の関東には大型前方後円墳が多出する。欽明朝に官僚化が進んだ西日本に比べ、関東（や国内の一部の有力地域）には、旧来の豪族の連合的秩序—前方後円墳システム—が機能していたことを示す（図 6）。王家や中央氏族は、屯倉や名代の設置などを介して、その管理を委ねる地方豪族（伴造系氏族）と個別に手を結び、前方後円墳の権威性をカードにして、経済的・人的な貢納関係を取り結んだと考えられる。それまで前方後円墳を造れなかった東国の中位豪族層は、中央との関係を誇示するツールとして前方後円墳の承認を歓迎し、地域内競合で優位に立つために競って築造したのであろう。多彩な装飾付大刀もまた、そうした半自立的地域へ配布された、中央との関係を示すためのツールのひとつであった。

（4）上毛野の装飾付大刀

ところで、装飾付大刀を最も多く出土している上毛野（170 振が知られる。ちなみに隣の下毛野では 40 振）においては、前方後円墳（第 1・第 2 ランク）だけでなく、第 3 ランクである 2～30 m 級円墳にも多くが保有されている。さらには、第 4 ランクといえる群集墳中の 10 m 程度の小円墳からもかなりの数が出土している（図 11）。特に 7 世紀には下位に広がり、ムラを構成する世帯の長クラスまで保有されたイメージをもつ。そして形式は偏らず、あらゆる形式が混在する（図 13）。

出雲などでは大刀の分布の形式差から、在地氏族と特定氏族との結びつきが指摘されている（松尾 2005）。その原理と同様に、上毛野の下位層までが中央氏族と直接に手を結んだといえるのだろうか。大刀の形式の混在からみて、その解釈は難しいだろう。氏族系譜とは別な枠組みで多彩な大刀がもたらされたと思える。上毛野の代表的氏族である上毛野君氏は、7 世紀までには在地と中央に本拠を構え（両貫制）、中央においては舒明期に征夷の将軍（上毛野君形名）を輩出し、天武朝には朝臣の姓を得た。上毛野には君姓氏族が多く確認され、上毛野君氏が主導した君姓氏族の強い秩序（図 8）が存在したと指摘される（川原 2005）。この地の装飾付大刀は、中央の上毛野君氏が入手し、大国造であった地元の上毛野君氏はその秩序に従って配布した可能性も排除できない。なお、関東の中でも房総では、装飾付大刀は上・中位に占有される（内山 2019）。大国造と小国造の政治的な立場を考えさせる現象である。

終わりに

装飾付大刀は、中央に少なく、地方に多く出土することから、中央が地方向けに分配する器物として製作されたのは間違いないようだ。しかし、倭装大刀のような神聖性や正当性を帯びた大刀とは異なり、中央氏族と地方氏族を結びつけるトレードマーク（商標）のような機能をもったことが推定される。近年では、倭装大刀やその系譜を引いた袋頭（頭椎・円頭・圭頭）の大刀が軍事（首長）、外来系の環頭大刀が外交・技術などの職掌にかかる表徴だったとする、より性格を絞り込んだ所見が提

示されている（橋本 2014・内山 2014）。

大刀の製作が一定氏族のコントロール下にあったとすれば、氏族の浮沈（例えば大伴氏の失脚や物部氏本宗の滅亡など）によって工人が流動化したことが推測される。6世紀末～7世紀前半に量産された装飾付大刀の一部は、氏族の商標という限定性から離れて流通する状況であったかもしれない。上毛野において多様な装飾付大刀を所持した小円墳被葬者層は、屯倉や紡織・窯業などの手工業地帯に分布し、比較的大きな横穴式石室を築くとともに、多数の円筒・形象埴輪を立て並べている（図 11・12）。旺盛な経済活動による富を蓄積しており、「財」として大刀を入手した状況も否定できない。

以上のように、装飾付大刀は、本格的な国家の形成に向かう直前段階の地方と中央の関係を読み解くアイテムとして重視される。しかし、その多様さと、配布先の偏り、さらに当時の政治状況からみて、統一された国家的身分制度の表徴ツールとは言い難い。

643年、蘇我入鹿に攻められて逃亡する山背大兄王（厩戸皇子の子）に対し、その側近が「東国の乳部（壬生＝上宮王家の名代）の軍事力をバックに再起を図るべし」と進言したように、6世紀後半から7世紀前半の東国は、旺盛な経済力と軍事力を保持して、王家が依存するような存在であった。山背大兄王の配下として軍事力を期待された大生部氏は、その頃の大王墓や蘇我氏の族長墓に比肩する一辺80mの大方墳（龍角寺岩屋古墳）を悠然と築いている。

そうした、東国の自立性を削いでいくのが本格国家確立への胎動期であろう。645年の大化改新の直後、東国国司がいち早く派遣された。武器を収公し、戸籍を作り、農地を検校し、評督の候補者を選任して都に帯同した東国国司の役割は、かつて前方後円墳が乱立し、当時も巨大方墳・円墳が林立する東国の自立性を、いち早く抑え込むための措置であったと考えられるのである。

【参考文献】

- 内山敏行 2011 「小札甲（圭甲）—北関東西部における集中の意味—」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
 内山敏行 2019 「大刀・甲冑・馬具から見た関東と東海東部の首長墓」『賤機山古墳と東国首長』雄山閣
 川原秀夫 2005 「上野における氏族の分布とその動向」『装飾付大刀と後期古墳』島根県教育庁古代文化センター
 金宇大 2017 『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版会
 白石太一郎 1996 「駄ノ塚古墳が提起する問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』65
 豊島直博 2017 「双龍環頭大刀の生産と国家形成」『考古学雑誌』99—2 日本考古学会
 徳江秀夫 2011 「装飾付大刀—上毛野地域を中心として—」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
 中塚武 2015 「酸素同位体比年輪年代法がもたらす新しい考古学研究の可能性」『考古学研究』62—2
 新納泉 1983 「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』30—3
 新納泉 2001 「空間分析から見た古墳時代社会の地域構造」『考古学研究』48—3
 橋本英将 2014 「金銅装頭椎大刀の佩用者と被葬者像」『文堂古墳』大手前大学史学研究所
 土生田純之 2018 『前方後円墳の実像』吉川弘文館
 広瀬和雄 2015 「海浜型前方後円墳を考える」『海浜型前方後円墳の時代』同成社
 北條芳隆 2017 「関東地方への前方後円（方）墳の波及を考える」『三角縁神獣鏡と三～四世紀の東松山』六一書房
 町田章 1976 「環刀の系譜」『研究論集Ⅲ』奈良国立文化財研究所
 松尾充晶 2005 「装飾付大刀と地域社会の首長権構造」『装飾付大刀と後期古墳』島根県教育庁古代文化センター
 松尾昌彦 2011 「馬具—集中の意味—」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
 若狭徹 2017 『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館
 若狭徹 2018 「東国における古墳時代地域経営の諸段階」『国立歴史民俗博物館研究報告』211

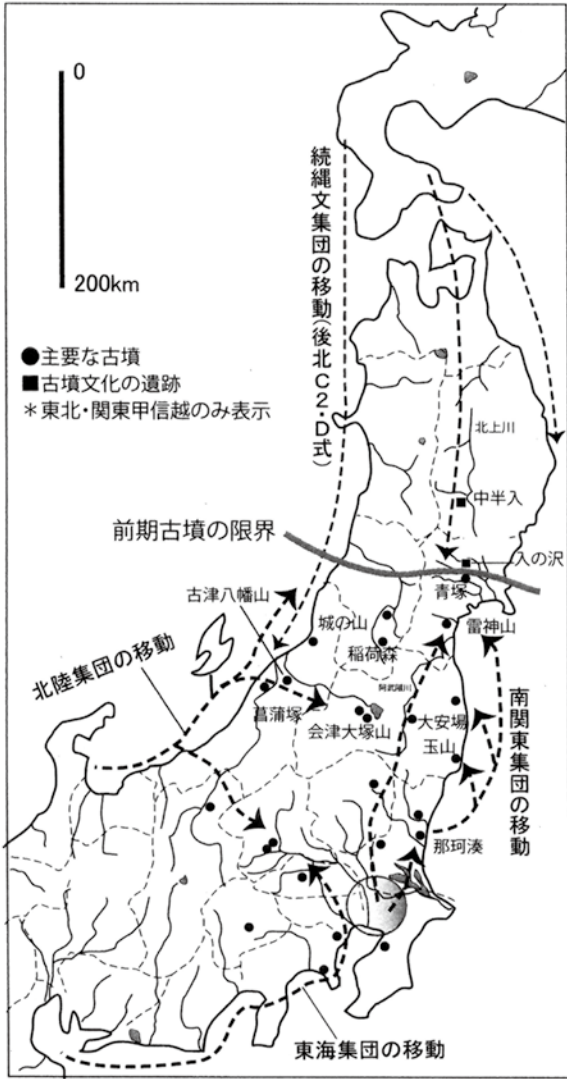


図1 古墳前期における東日本の集団移動

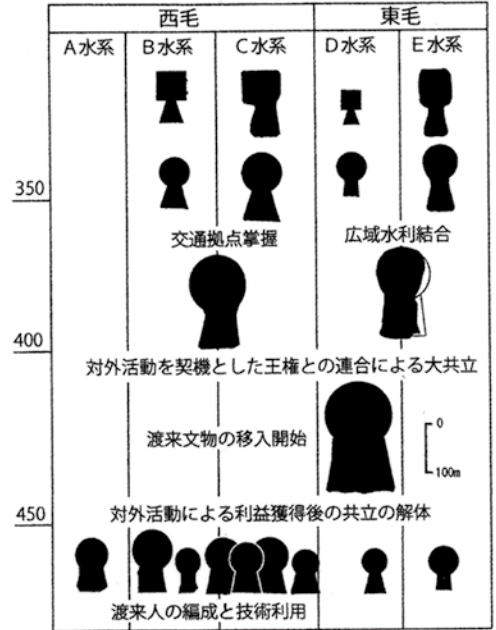


図2 上毛野における大首長の共立と解体

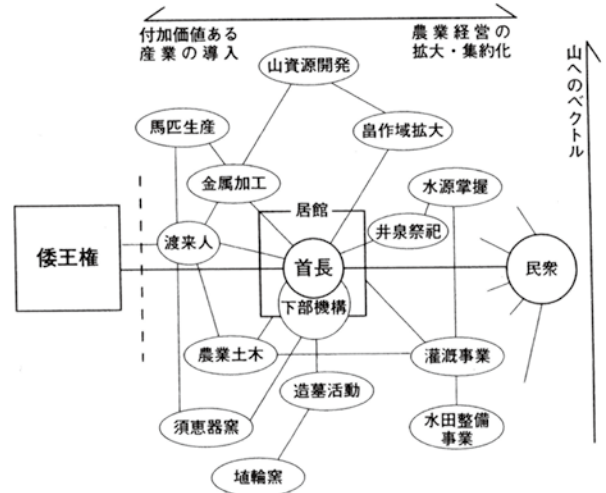


図3 5世紀後半の地域経営モデル

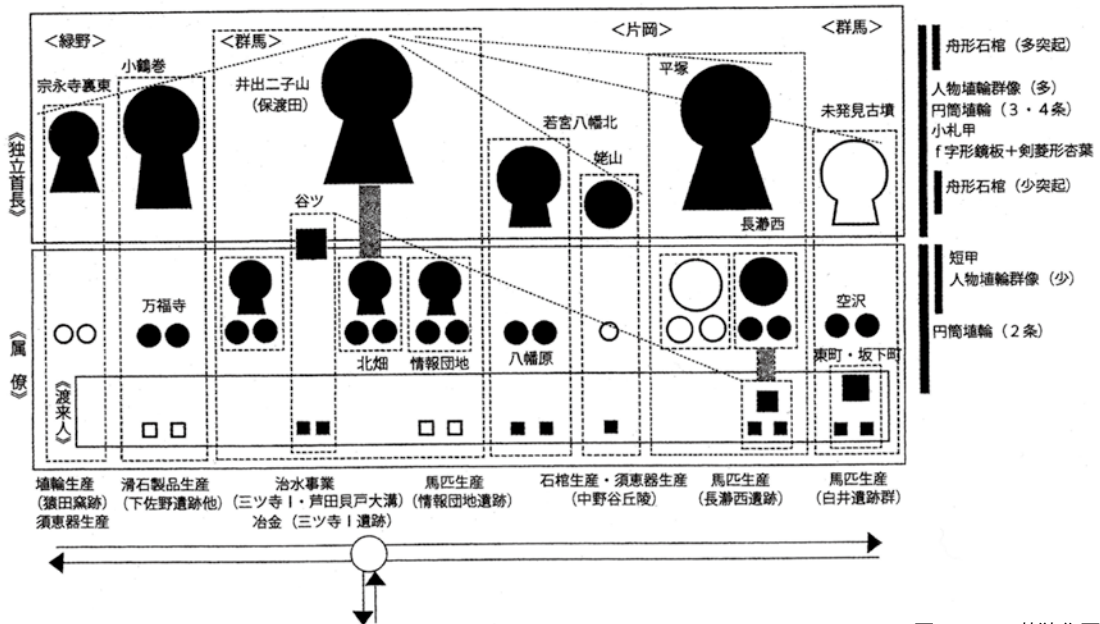


図4 上毛野における5世紀後半の秩序形成

* 図1~4: 若狭作図

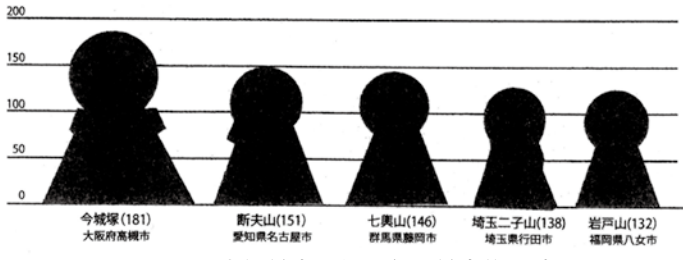


図5 6世紀前半の倭の主要前方後円墳

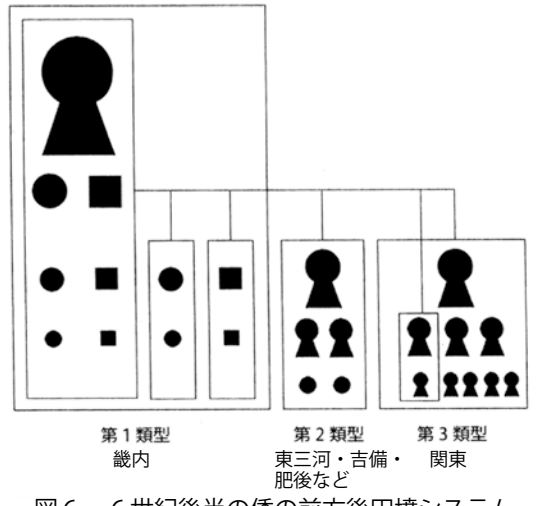


図6 6世紀後半の倭の前方後円墳システム

雄略期 保波田体制の解体 榛名山噴火 (FA)	保波田		
500 継体期 七興山体制 榛名山噴火 (FP)	七興山		
550 七興山体制の解体 4小地域の並立 屯倉の設置 技術移入 竊業・紡織 集団移入 部民・渡来人	凝灰岩切石積横穴式石室 d c 緑野屯倉	角閃石安山岩削石積横穴式石室 b a 佐野屯倉	
600	井野川流域 観音山	旧利根川西岸域 国造勢力 総社二子山	
総社体制 孝徳期 放光寺建立 天武期	山上碑	総社	
700 平城遷都 多胡郡建郡 (711)	緑野郡 多胡碑 金井沢碑	群馬郡	那波郡

図7 上毛野西部における国造と屯倉管掌者

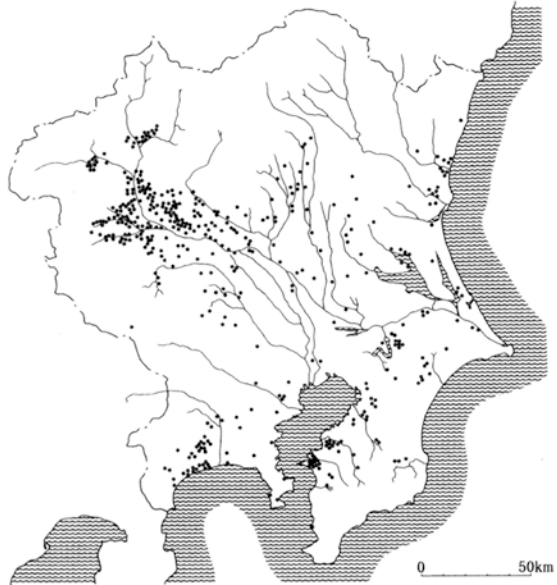


図9 関東における馬具副葬古墳の分布 (松尾 2011)

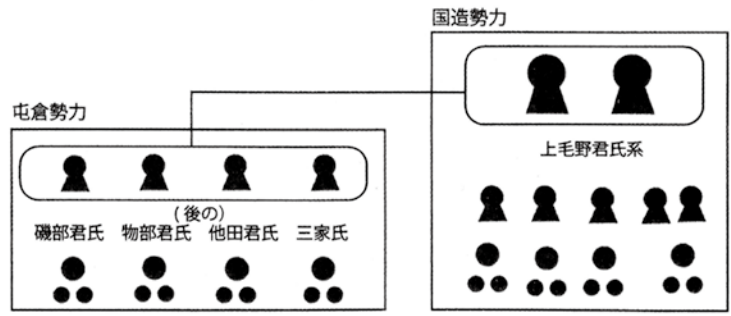


図8 国造勢力と屯倉勢力の関係モデル

*図5～8：若狭作図

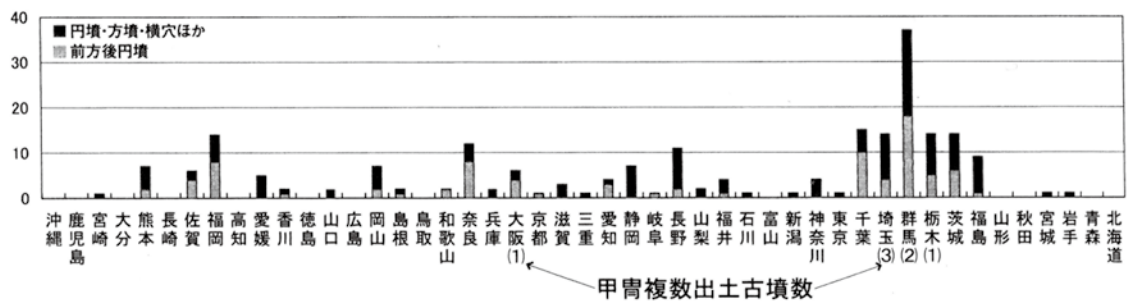


図10 古墳後期～終末期の甲冑出土古墳数 (内山 2011)

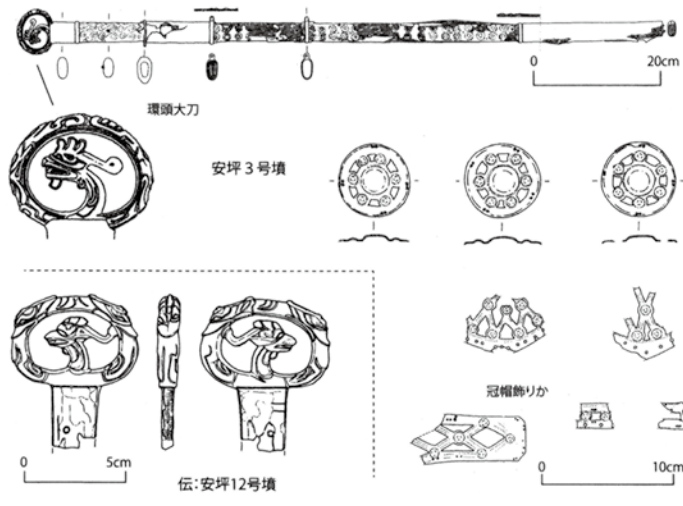


図 11 上毛野における小古墳の環頭大刀などの出土例
高崎市安坪古墳群（3号墳：11mの円墳、12号墳：15mの円墳）

* 図 11・12：若狭作図

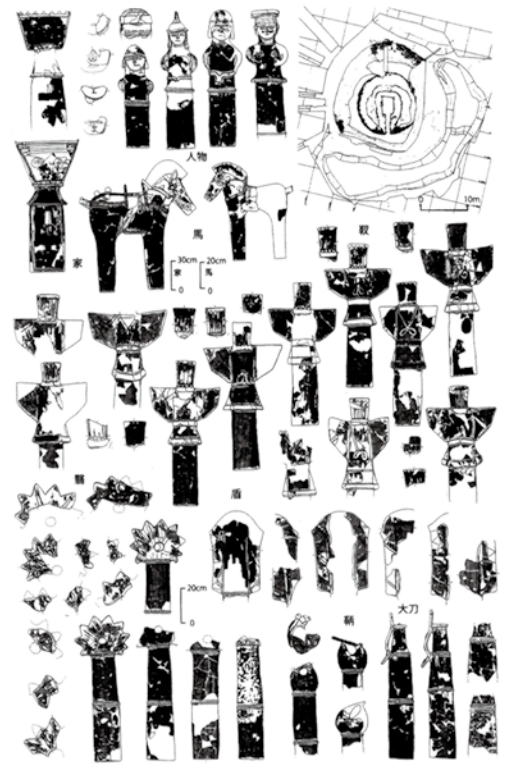
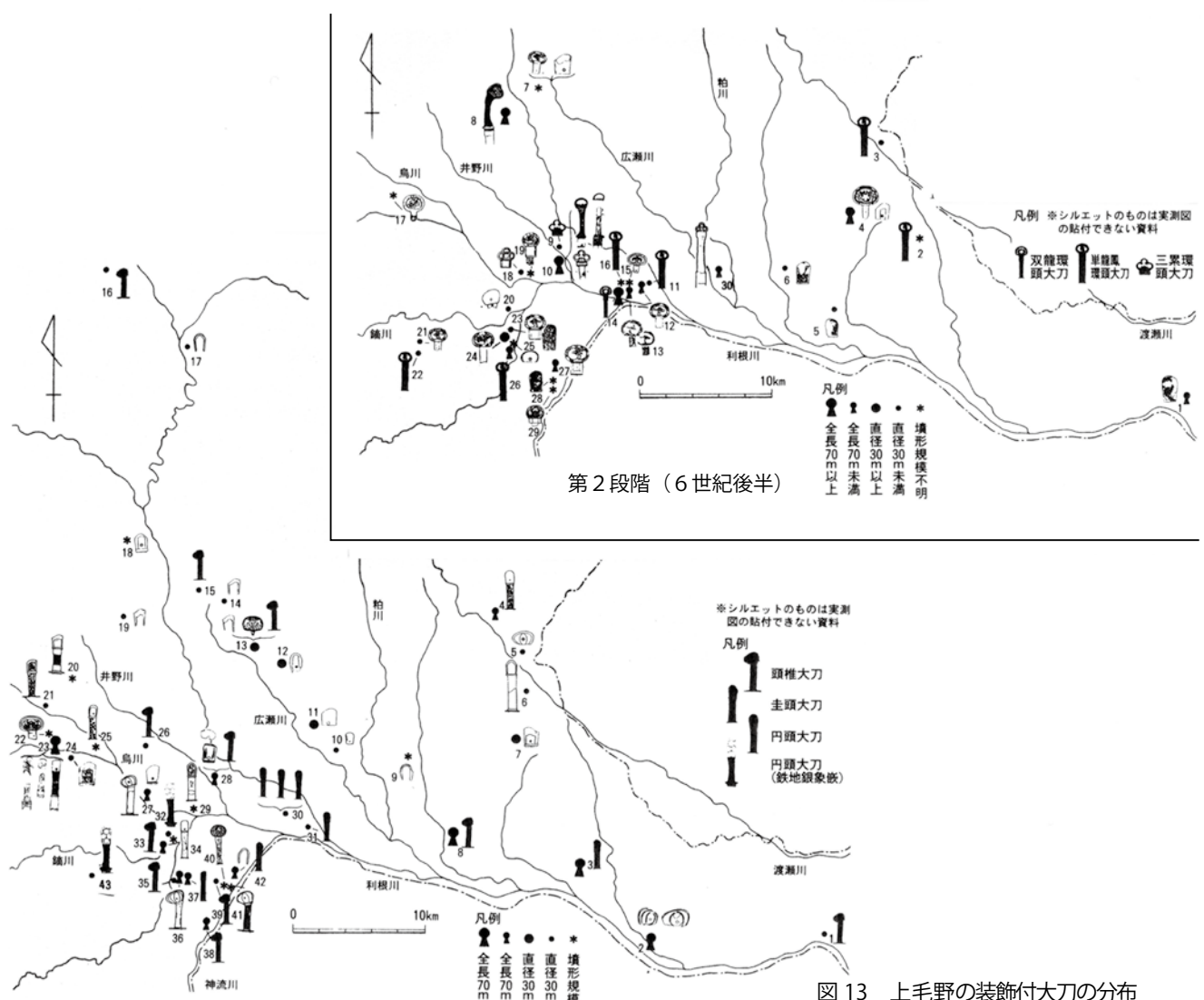


図 12 上毛野における円墳（中原1号墳：24m）の形象埴輪保有量



第3段階（6世紀末～7世紀初頭）

図 13 上毛野の裝飾付大刀の分布
（徳江 2011） * 若狭が改変

「古墳時代の神奈川県・東京都・埼玉県域 における社会構造と刀剣」



あおさ もとふみ
青笹 基史

(埼玉県立さきたま史跡の博物館 学芸員)

はじめに

神奈川県域・東京都域・埼玉県域では、後期の大型前方後円墳は埼玉県北部以外にはほとんど造営されず、装飾付大刀も群集墳中の小古墳から出土する傾向がみられる。神奈川県域には単龍鳳環頭大刀たんりゅうほうかんとう・圭頭大刀けいとう、東京都域には圭頭大刀、埼玉県域には頭椎大刀かぶつちのように、地域ごとに異なる種類の装飾付大刀が集中する傾向にある。こうした差異の背景は、古代国家誕生段階における近畿中央政権を構成する大王家とその周辺の豪族による武器配布戦略の一環によるものとして理解されている。

1. 神奈川県・東京都・埼玉県域の様相

当地域においては古墳時代前期に前方後円墳が各地に展開するが、中期になると前方後円墳が認められなくなる。中期末から後期初頭にかけて再び大型前方後円墳が築かれるという傾向は埼玉県北部においてのみ認められる。当該時期には他の地域でも一部で再び前方後円墳が築かれるものの、円墳が主体の群集墳の造営が盛行し、神奈川県域と東京都域の多摩川流域には群集墳と異なる場所に横穴墓が展開する。古墳の展開が地域で異なる背景に各地域の社会構造の差異が想定される。

2. 装飾付大刀の地域的様相

当地域の装飾付大刀の様相は地域内でも異なり、隣接する千葉県域や群馬県域とも様相が異なる。当地域では群集墳中の小古墳から装飾付大刀が出土する傾向がある。出土している装飾付大刀の種類を地域別にみると、神奈川県西部に単鳳環頭大刀、県中部に単龍環頭大刀、県内に圭頭大刀が点在し、東京都多摩川流域に圭頭大刀が、埼玉県北部に頭椎・方頭大刀がみられる。

頭椎大刀は物部氏、方頭大刀は大王家が生産に関与したと考えられている。当時の近畿中央政権は、東日本の在地首長層を国家規模の軍事組織に組み込もうとしており、その一端としての、武器の生産・配布を管理する意図が分布に反映されていると考えられる。

3. 埼玉古墳群と対外交渉

当地域において古墳時代の地域開発と渡来人の関わりについてうかがえる事例はほとんどない。地方豪族の対外交渉について考えると、埼玉古墳群内の稲荷山古墳（TK23-47 型式期）と將軍山古墳（TK10-43 型式期）が注目される。両古墳からは加耶系文物が出土しているが、將軍山古墳からは新羅系文物も発見されている。その背景には新羅による金官加耶併合（532年）、大加耶併合（562年）といった朝鮮半島南部地域への新羅の進出という社会構造の変化が想定される。

4. 埼玉稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣

埼玉稲荷山古墳出土金錯銘鉄剣は1968年に未盗掘の埋葬施設から豊富な副葬品とともに発見され、1978年の保存処理中に金象嵌の銘文が発見されたものである。1983年に国宝「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」として指定された。銘文には「辛亥年しんがいねん」の紀年銘・「ヲワケ」という人物とその一族の系譜・「ワカタケルわかたける」大王の名前・「杖刀人じょうとうじん」という役職・「ヲワケ」が「杖刀人」の長として大王

に仕えていたことが記されている。辛亥年は国内では471年がほぼ定説となっており5世紀後半の雄略朝における原始官僚制である「人制」の存在が確かめられたことの歴史的意義は計り知れない。

「人制」は「部民制」の前段階の組織といえ、「杖刀人」は「丈部」^{はせつかべ}の前身とされている。「杖刀人の長であるヲワケ＝埼玉稲荷山古墳の被葬者」の図式には異論があるものの、近畿中央政権と深い関わりのある被葬者が当地域に存在したことに疑いはない。

5. 埼玉古墳群と武蔵国造の乱

埼玉二子山古墳（TK10型式期・墳丘長約132m）は、埼玉県域において後期を通じて最大規模の前方後円墳である。この時期に墳丘長130mを超す前方後円墳は列島全体でも極めて限られており、尾張連草香^{おわりのむらじくさか}と断夫山古墳^{ちくしのきみいわい}、筑紫君磐井と岩戸山古墳のように、文献史上の人物・事件との関わりが指摘されている。若狭徹氏は二子山古墳と日本書紀安閑記に記される「武蔵国造の乱」との関連に言及している（若狭2017）。この乱は安閑天皇元年（534年）に、武蔵国造職を巡る笠原直^{かさらのあたい}の同族内での争いに端を発する大和朝廷と上毛野の豪族の代理戦争の様相を呈する事件である。

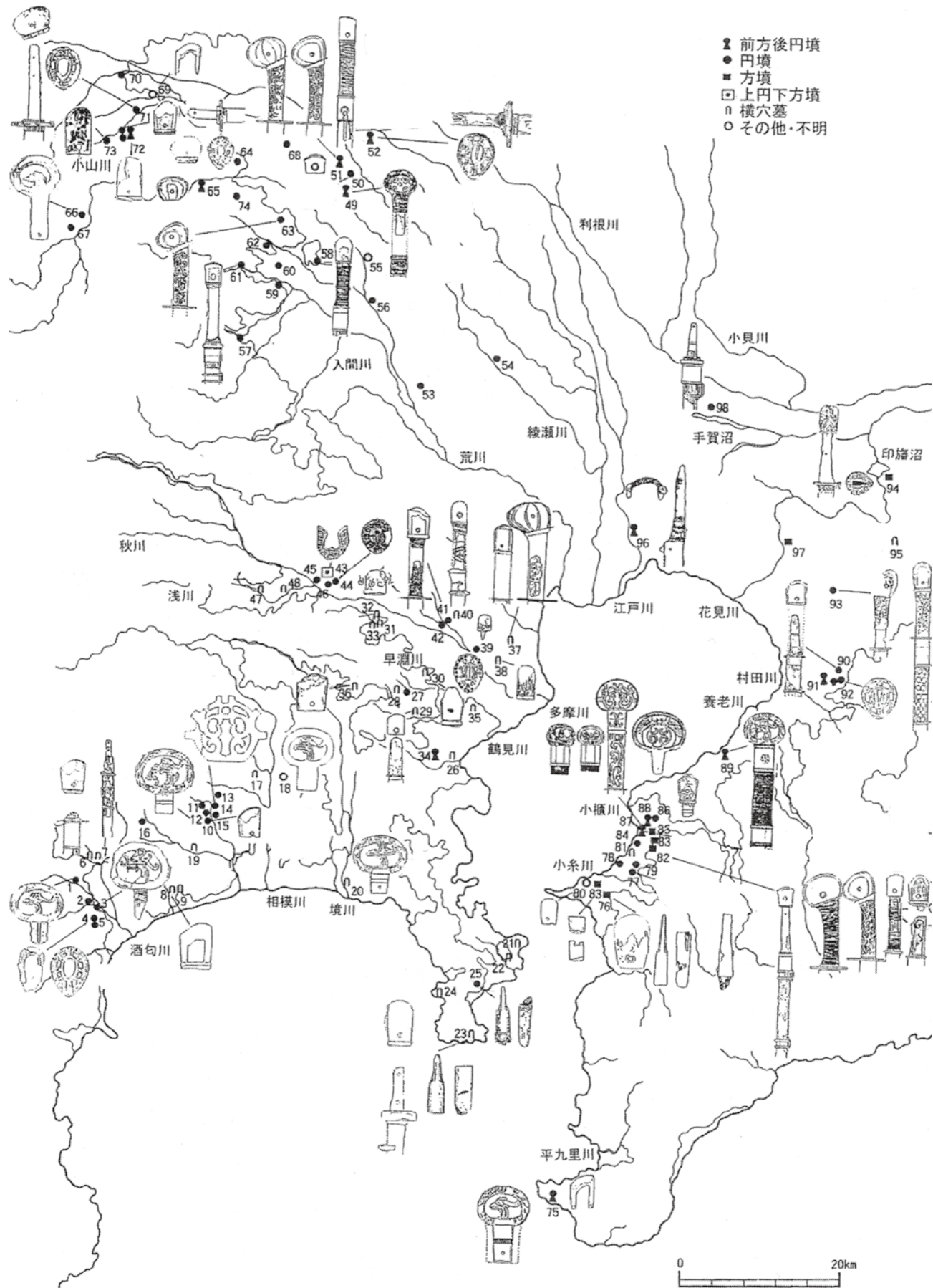
若狭氏は、この乱の勝者である武蔵国造の笠原直使主^{かさらのあたい おみ}を二子山古墳の被葬者、上毛野小熊^{かみつけぬのおくま}を群馬県域における同時期最大の前方後円墳である藤岡市七輿山古墳の被葬者と想定している。

おわりに

神奈川県・東京都・埼玉県域においては後期の群集墳中の小古墳から装飾付大刀が出土する傾向がみられる一方で、地域ごとに異なる種類の装飾付大刀が出土する。配布される装飾付大刀の種類が異なる背景には、それぞれの地域の社会構造と近畿中央政権を構成する大王家とその周辺の豪族との関わりなどの重層的な構造が想定される。

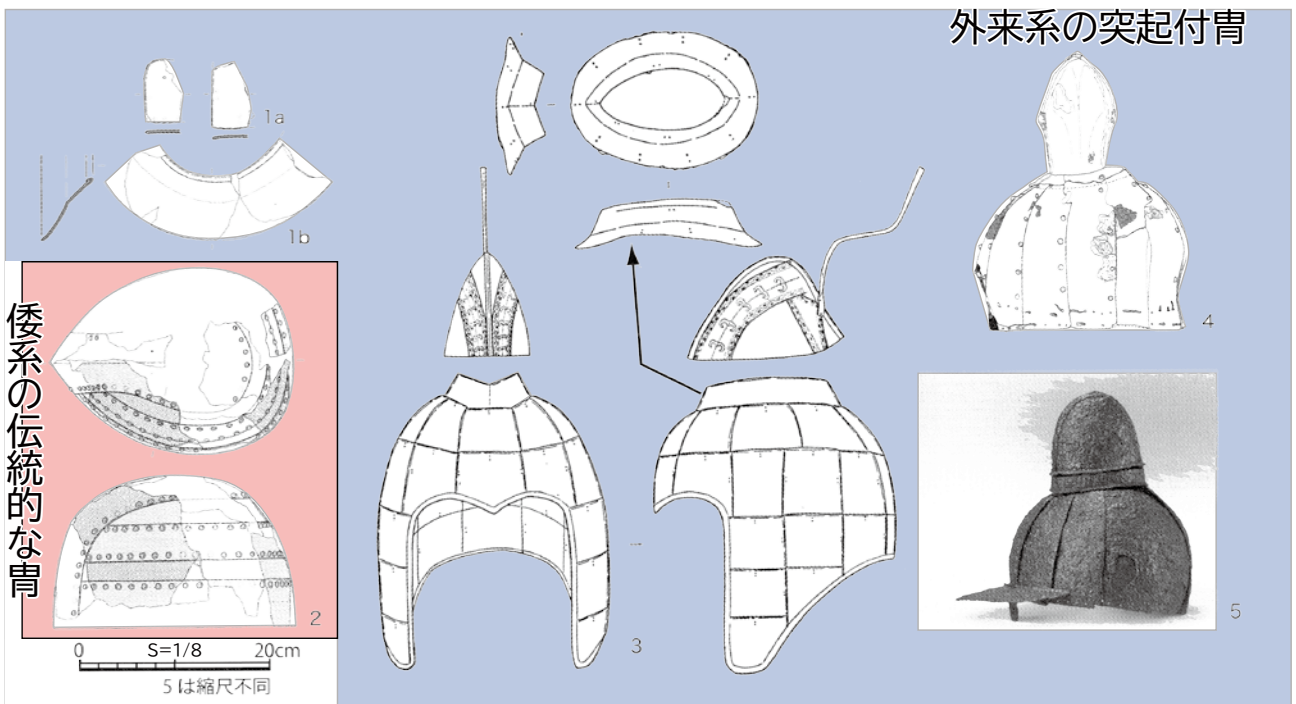
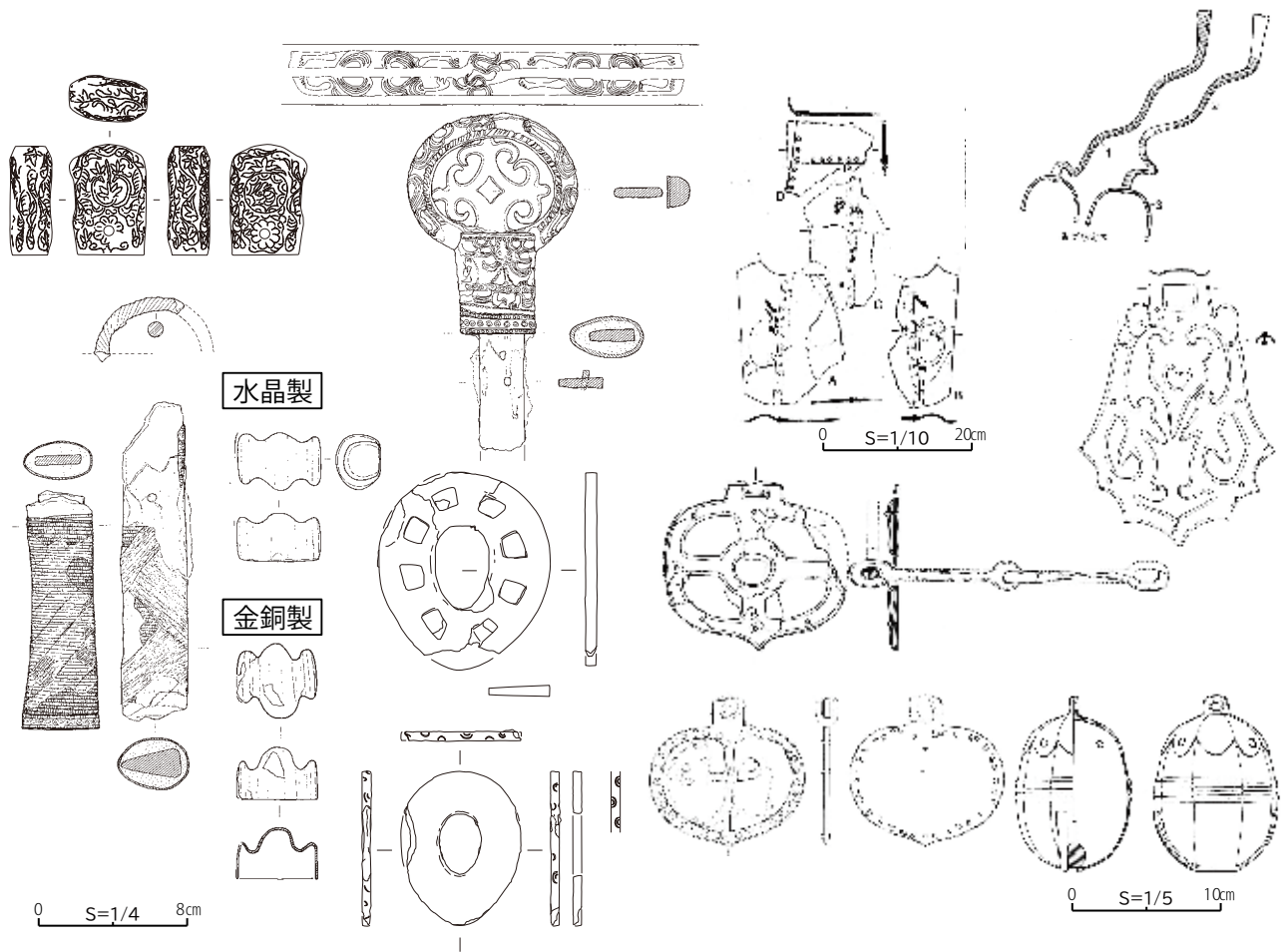
【参考文献】

若狭 徹 2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館



埼玉県

図1 神奈川県・東京都・埼玉県域における装飾付大刀の分布
 (松崎元樹 2007 「後・終末期古墳の威信財」『武蔵と相模の古墳』季刊考古学別冊 15 雄山閣 pp.99 東京都に一部加除)



1a,1b 埼玉県 将軍山古墳 方形板革綴青 (岡本健一編 1997 『将軍山古墳』 確認調査編・付編 埼玉県教育委員会)
 2 埼玉県 将軍山古墳 衝角付青
 3 韓国慶尚南道 陝川礪溪堤ガA号墳 冠帽付方形板革綴青 (国立晋州博物館編 1987 『陝川礪溪堤古墳群』 慶尚南道)
 4 群馬県 綿貫観音山古墳 突起付青 (徳江秀夫編 1999 『綿貫観音山古墳Ⅱ 石室・遺物編』 群馬県教育委員会)
 5 韓国全羅南道 南原月山里 M5号墳 鉄製冠帽付青
 (최경환 2012 『南原月山里発掘遺物特別展 雲峰高原に葬られた加耶武士』 国立全州博物館・(財)全北文化財研究院)
 内山敏行 2013 『将軍山古墳の武器・武具』 『古代の豪族～将軍山古墳とその時代～』 埼玉県立さきたま史跡の博物館 埼玉 p.19 一部加筆
 図2 埼玉将軍山古墳の主な副葬品と外来系青の類例

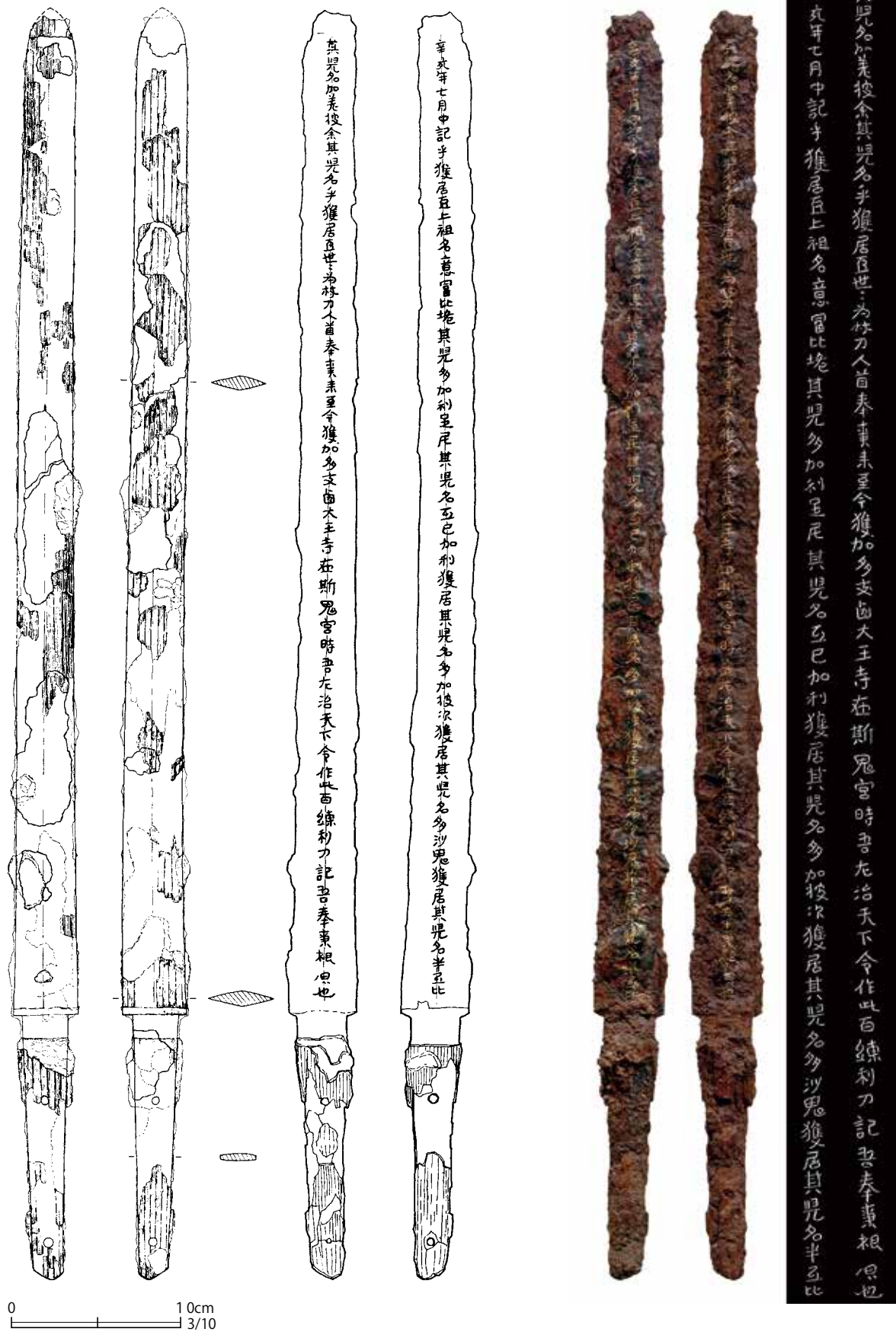


図3 稻荷山古墳出土金錯銘鉄剣
 (埼玉県教育委員会 2018『史跡埼玉古墳群総括報告書Ⅰ』・埼玉県立さきたま史跡の博物館 2019『徹底解剖！埼玉古墳群』)

「刀剣類からみる古墳時代の三重」



かくしやう じゆんこ
角正 淳子

(三重県文化振興課 主査)

はじめに

三重県は紀伊半島の東部に位置し、南北に長い県である。南は和歌山県、西は奈良県・滋賀県に接し、東は伊勢湾・熊野灘が広がる。古代においては、伊勢・伊賀・志摩・紀伊の4ヶ国に分かれていた。これらの立地条件から、当時の中心地であった奈良から見ると東国への玄関口の一つであった。また陸路だけでなく、海路もひらけていたことから、交通の要衝でもあり東と西の文化が交わる場所である。

1. 刀剣類出土事例からみる古墳時代の三重

今回の研究は始まったばかりであるが、刀剣類の出土例は約520例、出土遺跡数は約180箇所を数える。時代別に見てみると、古墳時代前期では、奈良県に接する伊賀国と伊勢国でも中勢部で出土が確認されている。なかでも、伊賀市に所在する石山古墳は昭和23年から26年に京都大学によって発掘調査が行われ、3つの主体部からたくさんの刀剣類が出土している。県内では屈指の前期末から中期初にかけての古墳である。

中期に入ると、伊勢平野での刀剣類の出土事例が増加する。伊賀及び中勢部から段々と県南部へと分布が広がる傾向がみられる。後期においては、さらに伊勢平野での出土事例が増え、その分布域も広がっていく。

2. 古墳時代中期から後期の状況

志摩市の志島古墳群は志摩半島の標高20m前後の丘陵上に立地する古墳群で13基が存在したことが確認されているが、開発等により現在は4基の古墳が現存している。そのひとつ志島11号墳(通称：おじよか古墳)は、昭和42年に発掘調査が行われ、海路による他地域との交流がうかがえる古墳時代中期の古墳である。開発により墳形は明らかでないが、遺体を埋葬した横穴式石室は九州北部の影響を受けたものである。一方で、出土遺物には渡来系の鉄製品が含まれ、多文化交流がうかがわれる。その後、造られた志島10号墳(上村古墳)、4号墳(塚穴古墳)では、それぞれ副葬品において渡来系や畿内の影響がみられ、世代ごとに違う地域と交流していたことがうかがえる。

また、亀山市に位置する井田川茶臼山古墳も九州北部の影響をうけた横穴式石室をもつ古墳である。標高約68mに所在する古墳で、昭和47年に発掘調査が行われた。石室内には2基の石棺と棺台と見られる平石があり、少なくとも3体が埋葬されたと考えられている。銀象嵌で龍文等を施した鞆口・ぞうがん りゆうもん さやくち鞆尻金具さやじりを持つ振り環頭大刀ねじのほか、鏡・馬具・装身具・刀剣類等の豊富な遺物が出土している。

一方で、伊勢市の高倉山古墳のように、在地色の強い石室をもつ古墳も少なからず存在する。このように三重県においては、その土地に根差した形だけでなく、畿内や九州北部など幅広い地域との交流をうかがわせる様相が明らかである。

3. 装飾大刀について

県内では18例が確認されているが、出土地別にみると、伊賀が3例、伊勢が15例とそのほとんどが伊勢国に位置する後期古墳からである。

県内での注目事例としては、先述の井田川茶白山古墳出土例の他に、明和町坂本に位置する坂本1号墳から出土した金銅装頭椎大刀^{かぶつち}があげられる。坂本1号墳は全長31.2mの前方後方墳^{わり}であり、割竹形木棺^{たけがたもっかん}を据えたとみられる埋葬施設から大刀のほか直刀、須恵器が出土した。出土遺物から7世紀前半の築造と考えられる。この古墳から1km程離れた所には、飛鳥時代に入り伊勢神宮の祭祀を担う皇女が暮らした斎宮^{さいくう}が造営される。斎宮成立期に深く関わった人物との関連も考えられ興味深い資料である

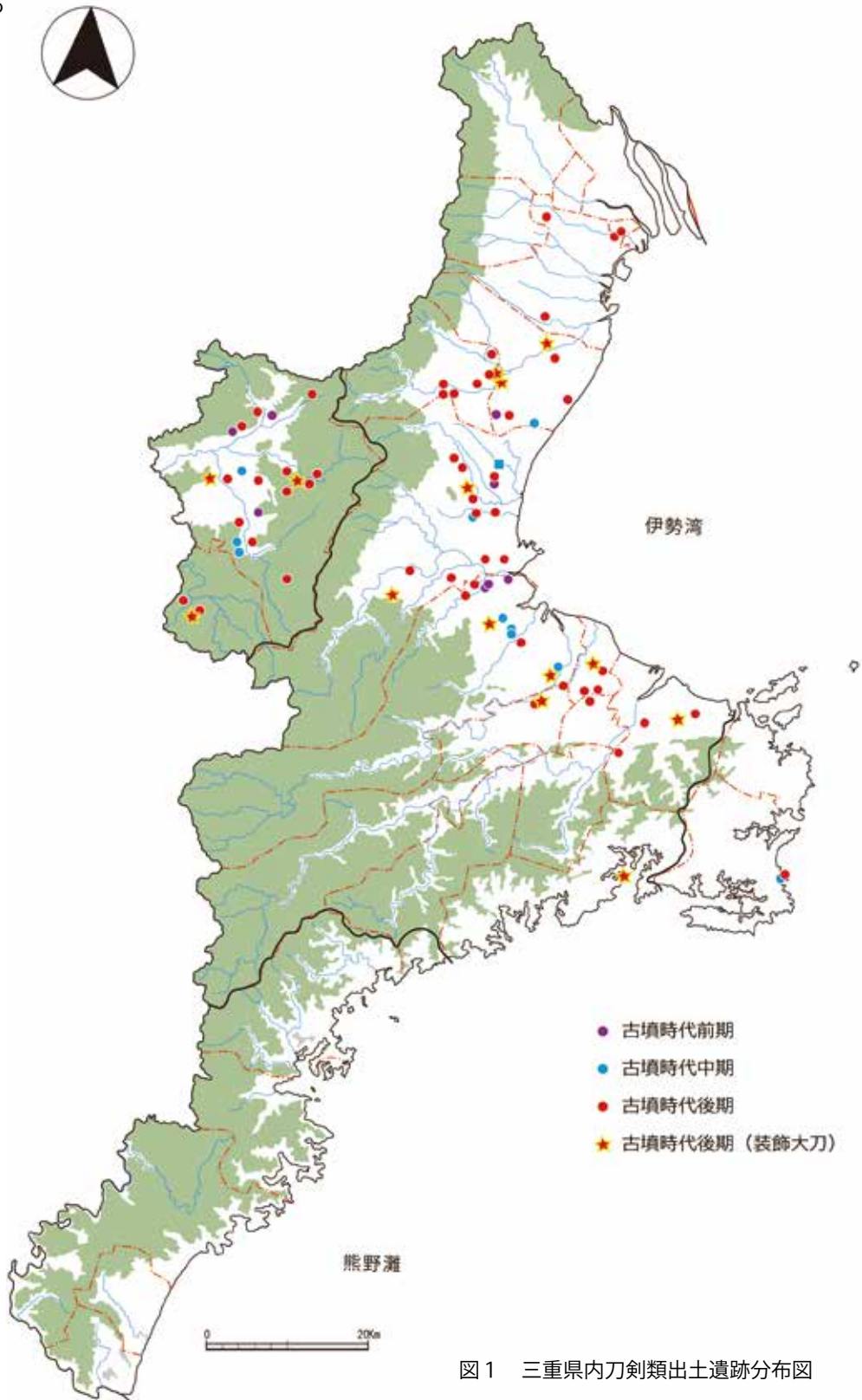


図1 三重県内刀剣類出土遺跡分布図

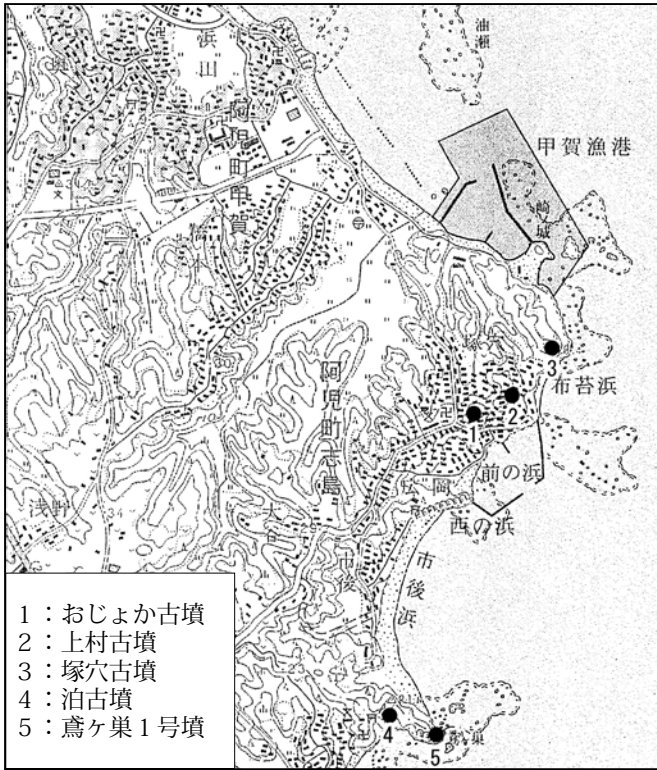


図2 志島古墳群ほか遺跡位置図
 (『おじよか古墳(志島古墳群 11号墳)発掘調査報告—金属製品編—』
 志摩市教育委員会 2016より)



写真1 おじよか古墳出土刀剣類
 (『おじよか古墳(志島古墳群 11号墳)発掘調査報告—
 金属製品編—』志摩市教育委員会 2016より)



写真2 おじよか古墳石室



写真4 塚穴古墳遠景



写真3 上村古墳石室



写真5 塚穴古墳石室

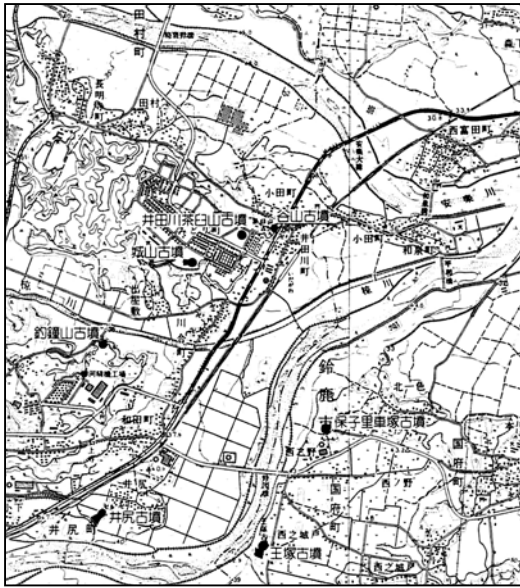


図3 井田川茶白山古墳ほか遺跡位置図



図4 石室平面図



写真6 石室出土状況



写真7 振り環頭大刀（銀象嵌部分）

図・写真出典
『井田川茶白山古墳』三重県教育委員会 1988

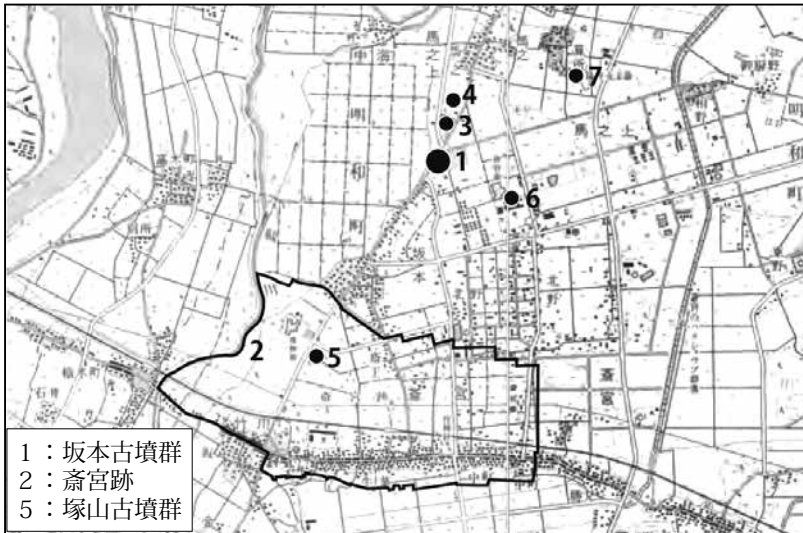


図5 坂本古墳群ほか遺跡位置図



写真8 金銅装頭椎大刀出土状況



写真9 金銅装頭椎大刀

図・写真出典
『坂本古墳群発掘調査概要報告』
三重県明和町教育委員会 2011

「和歌山県の古墳時代の刀剣類の調査と研究」



くろいし てつ お
黒石 哲夫

(和歌山県文化遺産課 教育企画員)

1. 和歌山県の古墳時代の刀剣類の概観

和歌山県内の古墳数は、約 1600 基であり、刀剣類が出土した古墳について現在集計中であるが、内容が判明するものでは 75 基で、前・中期古墳が 27 基、後期古墳が 48 基である。出土数は、遺跡も含めて 150 点である。

装飾付大刀は、刀装具等を含めて、12 点であり、鹿角製刀剣装具は 7 点、木製刀剣装具は 1 点、蛇行状鉄剣は 2 点、青銅製剣は 1 点出土している。

和歌山市の 2 つの集落遺跡と田辺市海浜部の岩陰遺跡で鹿角製刀剣装具が出土し、和歌山市の集落遺跡で木製刀剣装具が出土している。直弧文が彫られ朱彩されたものが多い。同様の刀剣装具が、大阪湾周辺から伊勢・志摩、房総半島の海浜部まで広範囲に分布している。

2. 各器種の出土状況

(1) 刀 89 点 (59.3%)

(装具有 16 点・無 73 点・素環頭 2 点、鐔付き 2 点)

①金属製装飾付大刀 11 古墳 12 点

A 単鳳環頭大刀 1 古墳 1 点

鳴滝 1 号墳 (6C 後半・円墳・25m)

B 圭頭大刀 1 古墳 1 点

伝岩橋千塚古墳群 1 点

園部円山古墳 (6C 後半・円墳・25m)

金銅装・花型文

C 銀装大刀 (銀線蛭卷大刀) 1 古墳 1 点

岩内 1 号墳 (7C 中頃・方墳・19m)

D 振り環頭大刀 1 古墳 1 点

鳴滝 1 号墳 (6C 後半・円墳・25m)

E 銀象嵌鐔 1 古墳 1 点

山東 22 号墳 (6C 後半・円墳・27m) 銀象嵌鐔

F 金銅製刀装具等 7 古墳 7 点

黒土古墳 (6C 後半・円墳・25m)

船戸箱山古墳 (6C 後半・方墳・28 × 20m)

園部円山古墳 (6C 後半・円墳・25m)

井辺 1 号墳 (7C 前半・方墳・28 × 40m)

寺内 60 号墳 (6C 末・円墳・16m)

祓井戸 10 号墳 (6C 後半・円墳・20m)

辨天山古墳 (6C 中頃・円墳・12m)

②鹿角製刀剣装具 3 遺跡 7 点

田屋遺跡 (5C 中頃～7C) 鹿角製鞘尻装具

西庄遺跡 (5C 中頃～7C) 鹿角製把縁装具 2、

鞘尻装具〔朱彩〕

磯間岩陰遺跡 (5C 中頃～7C) 鹿角製把頭装具、

把縁装具、鞘尻装具〔直弧文・朱彩〕

③木製刀剣装具 1 遺跡 1 点

鳴神 II 遺跡 (5C) 木製把縁装具、

〔直弧文・漆塗・朱彩〕

(2) 剣 39 点 (26.0%)

(前・中期古墳 29 点 74.4%・後期古墳 10 点 25.6%)

①蛇行状鉄剣 2 古墳 2 点、

陵山古墳 (5C 後半・円墳・46m)

寺内 63 号墳 (5C 中頃・円墳・25m)

②青銅製剣 1 古墳 1 点

山崎山 5 号墳 (5C 初・前方後円墳・45m)

(3) ヤリ 8 点 (5.3%)

(前・中期古墳 6 点 75.0%・後期古墳 2 点 25.0%)

(4) 鉾 14 点 (9.3%)

(前・中期古墳 3 点 21.4%・後期古墳 11 点 78.6%)

3. 特徴及び分析

①刀・剣・ヤリ・鉾の比率は、59.3%・26.0%・5.3%・9.3%である。

②前・中期古墳では、剣 (74.4%) とヤリ (75.0%) の比率が高く、後期古墳では、刀 (67.4%) と鉾 (78.6%) の比率が高い。

③刀剣類の副葬は、5C 初めの大型古墳から始まり、山崎山 5 号墳では、青銅製剣と鉄剣が相伴している。

- ④大型古墳から装飾付大刀が出土し、武器類のほか、馬具や装身具も共伴する。
- ⑤海浜部の遺跡から鹿角製刀剣装具が出土し、海人集団との関わりがあると推定される。
- ⑥御坊市の岩内1号墳では、銀線蛭巻大刀が出土している。有間皇子の墓と考える研究者もいる。

【参考・図版引用文献】

和歌山県立紀伊風土記の丘 2016 特別展図録『岩橋千塚とその時代—紀ノ川流域の古墳文化—』

和歌山市教育委員会 2018 和歌山市の文化財 15 『園部円山古墳』



写真1 山崎山5号墳出土鉄剣・青銅剣・土器類(5C初)



写真2 岩内3号墳出土遺物(5C初)



写真3 陵山古墳出土鉄鏃・石突・鉄剣・蛇行状鉄剣(5C後半)



写真4 晒山1号墳出土小鉄刀・鉄ヤリ(5C前半)



写真5 鳴滝1号墳出土単鳳環頭大刀(6C後半)



柄頭

鞘金具



圭頭柄頭

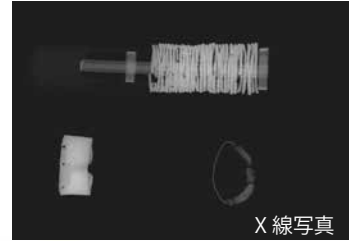


柄頭透かし飾り

写真7 園部円山古墳出土圭頭大刀(6C後半)



写真6 鳴滝1号墳出土振り環頭金具(6C後半)



X線写真



写真8 岩内1号墳出土銀線蛭巻大刀(7C中頃)



写真9 伝岩橋千塚古墳群出土圭頭大刀



写真10 磯間岩陰遺跡1号石室人骨検出状況



鞘尻装具

鞘口及び柄縁装具

柄頭装具

写真11 磯間岩陰遺跡1号石室出土鉄剣(5C)



写真12 鳴神II遺跡出土木製刀剣装具(5C)



写真13 西庄遺跡出土鹿角製刀剣装具(5C)



図1 和歌山県刀剣類出土古墳所在地図

表1 和歌山県古墳時代刀剣類出土古墳（一部）

No.	古墳名	墳形	墳長	埋葬施設	時期	刀 (装具有)	刀 (装具無)	剣	ヤリ	鉾	甲冑	馬具	鍬	武器	その他
1	陵山古墳	円墳	46m	横穴式石室	5C後半		4?	4?	1	2	○		○	鉄鍬	カシバ・鉄製品
2	丸山古墳	円墳	42m	箱式石棺	5C前半		1								鉄鉢・鉄挺
3	鳴滝1号墳	円墳	25m	横穴式石室	6C後半	単鳳1 振り環頭1	4					○	○	鉄鍬	金銅製新羅・銀製玉類
4	園部円山古墳	円墳	25m	横穴式石室	6C後半							○			
5	大白山70号墳	円墳	14m	横穴式石室	6C前半		1								鍛冶具類
6	山東22号墳	円墳	27m	横穴式石室	6C後半	1						○		銀象嵌鐙	金製冠
7	山崎山5号墳	前方後円	45m	割竹形木棺	5C初										
8	坂東丘1号墳	円墳	不明	不明	5C後半	素環頭1			1						六獣鏡・玉類
9	岩内1号墳	方墳	19m	横穴式石室	7C中頃	銀線蛭巻1									漆塗棺
10	上ミ山古墳	円墳	40m	横穴式石室	6C前半		2			1					

時期		刀 (装具有)	刀 (装具無)	剣	ヤリ	鉾	合計
前期・中期古墳	27基	1	28	29	6	3	67点
		6.2	38.4	74.4	75.0	21.4	44.7%
後期古墳	48基	15	45	10	2	11	83点
		93.8	61.6	25.6	25.0	78.6	55.3%
		16	73	39	8	14	150点
		59.3%		26.0%	5.3%	9.3%	100%

「出雲の装飾付大刀からみた、古墳時代後期の地域首長と王権」



まつお みつあき
松尾 充晶

(島根県古代文化センター 専門研究員)

1. 装飾付大刀の展開と画期

(1) “継体朝威信財”と王権の地域拠点

装飾付大刀の副葬が広まる古墳時代後期前半(MT85～TK10 型式段階)、山陰日本海側の各地に新式の馬具(f字形鏡板付轡や馬鐸など) および護拳帯付倭系大刀を副葬する首長墳が新出する。これらは広域交通上の中継地となる要衝に立地しており、被葬者は継体大王擁立や韓半島兵站を支える新興の首長層と理解されている。ミヤケ関連地である例も多く、この時期に展開した王権による地域支配、端的にはミヤケ設置を在地で管掌した首長に対して、威信財として与えられたのがこうした馬具・大刀であろう。

(2) 装飾付大刀佩用者の拡大

6世紀中葉～後葉(TK10～TK43 型式段階)、出雲では東西にそれぞれ、古墳時代を通じて最大規模の前方後円(方)墳が築かれる(図1)。古墳に階層秩序がはっきりと表現されており、最高首長に従属する第2階層の横穴式石室墳まで、金銀装の装飾付大刀が副葬されている(東部出雲では最上位の古墳が状況不明)。これが6世紀末葉以降(TK209 型式段階)になると、装飾付大刀の佩用階層が下位へと拡大していく。出雲の場合、群集墳に相当する墓制として斜面の岩盤に墓室を掘り込んだ横穴墓が爆発的に急増し、その3穴に1穴には装飾装具のない鉄刀が副葬されるとともに、石棺を内蔵する一部の優位な横穴墓には後述するような装飾付大刀をもつものもあらわれる。

2. 装飾付大刀が語る、倭王権と地域首長の関係

(1) 部民制と地域秩序の二元性

岡田山1号墳(島根県松江市大草町)出土の鉄製円頭大刀に象嵌された銘文(図4)は、6世紀代の地方社会に部民制が展開していたことを実証する資料として極めて重要である。この古墳の被葬者(=額田部臣氏)は金銅装馬具など豊富な副葬品をもつ有力な人物であるが、墳丘・石室規模は出雲東部でナンバー2クラスであり、上位最高首長(おそらく出雲国造:出雲臣氏)に従う立場である。このように強固な地域内秩序の傘下に組み込まれている一方で、出雲在地の部民集団(この場合は、額田部皇女=後の推古天皇の養育に資する人々)を束ねる在地首長として、中央豪族である額田部連氏にも連なるといふ、いわば二元的関係の中に地域首長は存在していた。6世紀の装飾付大刀には、こうした部民制原理による地域首長と中央豪族の関係が色濃く反映されていると考えられる。

(2) 東西出雲の大刀系統差

そのような装飾付大刀の配与原理に関して注目されるのが、6世紀中葉～後葉の出雲にみられる大刀系列の排他的分布である(図2)。石室形態や葬送儀礼に表れる東西地域圏と、大刀の系統差が対応する。そのような現象の背景として、地域権力が王権中枢全体と均質的に結びついていたのではなく、それぞれ特定のたいばんぞう大伴造氏族との強い関係を元に伸長したことが想定できる(図6)。このような現象は三河東部などでも認められるものの、必ずしも普遍的ではない。出雲の場合は特にこれが顕著で、古代氏族分布や伝承等からは、西部出雲は物部氏と、東部出雲は蘇我氏との関係が示唆される。

(3) 装飾付大刀と職能

また、多数の古墳・横穴墓が造られた安来平野には、環頭大刀(単龍鳳・双龍)を副葬する横穴墓

が集中する（図3）。後の国郡郷制下の舎人郷に近接する地域であり、天平5年（733）完成の『出雲国風土記』には、「倉舎人君氏」の祖が欽明朝期に舎人として出仕したことが郷名の由来として記される（史料1）。在地社会の中では、石棺式石室に葬られた人物が最上位の首長であり、環頭大刀を副葬された横穴墓被葬者はそれに従属する地位、たとえば傍系子弟のような人物であった。舎人として貢上された彼らは天皇の王宮へ奉仕し、環頭大刀はその際に佩用したものと考えられる。天皇の王宮名を冠したいわゆる宮号舎人と龍鳳環頭大刀の関連は、他にも上毛野の玉村町周辺（檜前君の本拠地）や、東駿河（珠流河国造：金刺舎人）でも、副葬の集中として認められ、職掌を介した貢納奉仕に対応する大刀配与があったことがうかがえる。

（4）装飾付大刀から読み取る、古墳時代の社会

地域首長が装飾付大刀等の器財を入手する経路は、上述のような王権との通交に限定されず、独自の交渉や経済活動などから直接入手する場合もあったと考えられる。大刀のあり方はきわめて多彩かつ複雑だが、これをひもとくことで、国家誕生に至る過程の実像が浮かびあがってくるものと思う。

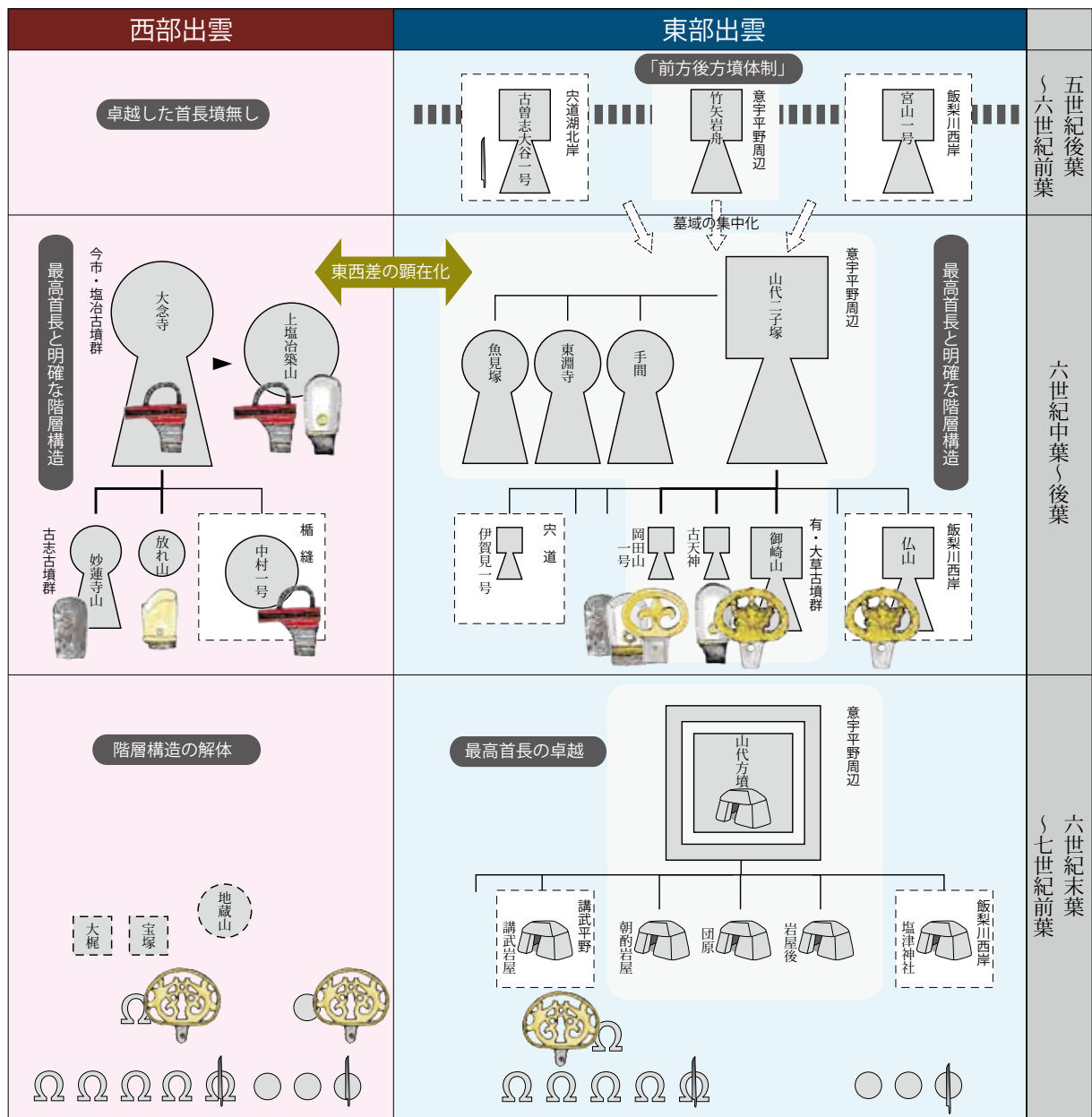


図1 首長権・階層構造の変化と大刀保有の関係

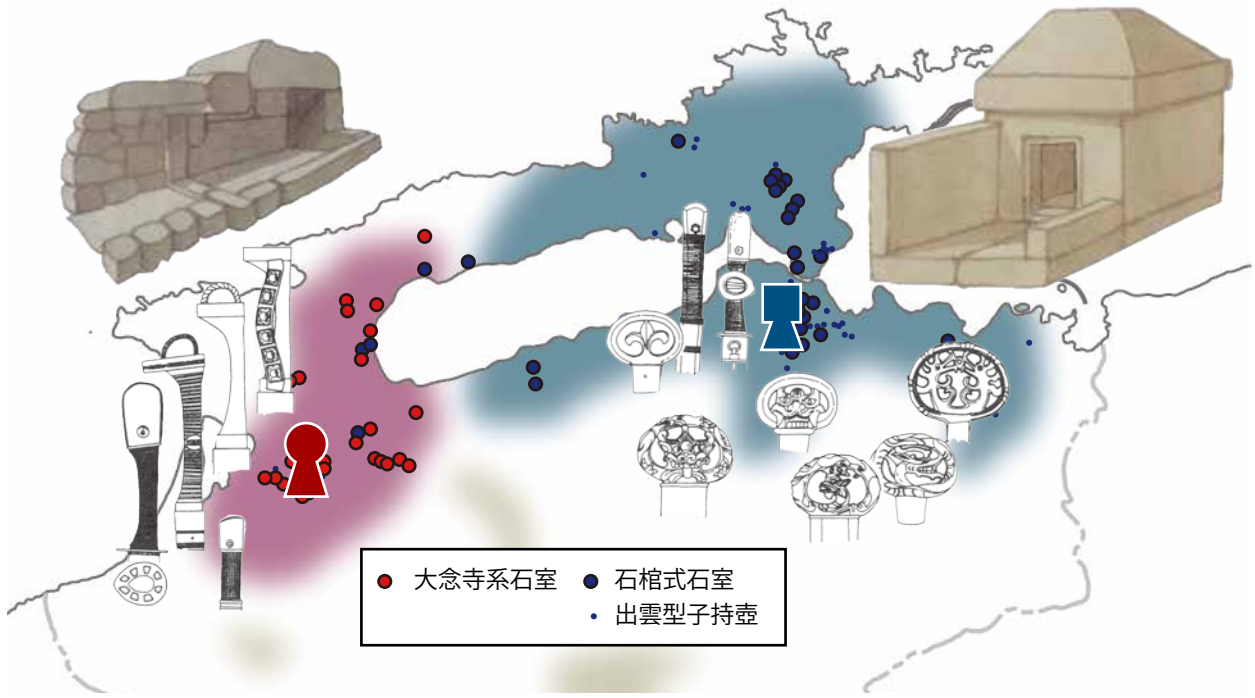


図2 石室形態・装飾付大刀系統にあらわれる出雲の東西差
(大刀はTK10～TK43型式段階)



図3 安来平野の古墳分布と、環頭大刀を副葬する横穴墓

史料1 『出雲国風土記』意宇郡条
 舎人郷。郡家の正東二十六里。志貴島の宮に御宇しし天皇(欽明天皇)の御代、倉舎人君等が祖、日置臣志毗、大舎人供へ奉りき。即ち是は志毗が居める所なり。故、舎人と云ふ。即ち正倉有り。

(訓み下しは萩原千鶴『全訳注出雲国風土記』講談社学術文庫による)

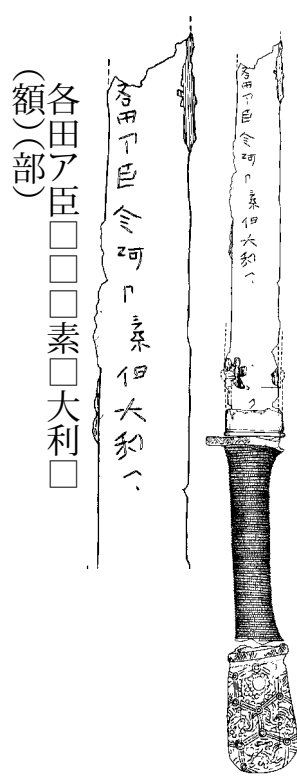


図4 岡田山1号墳鉄刀象嵌銘

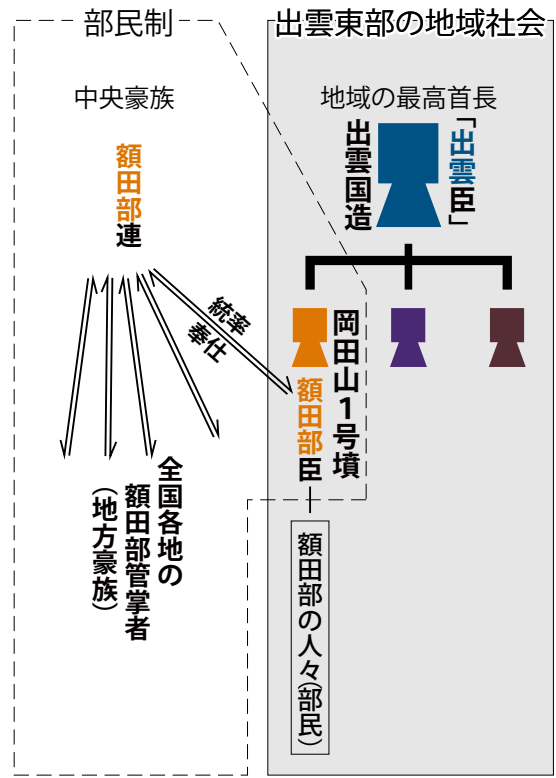


図5 部民制と地域内秩序の重層関係

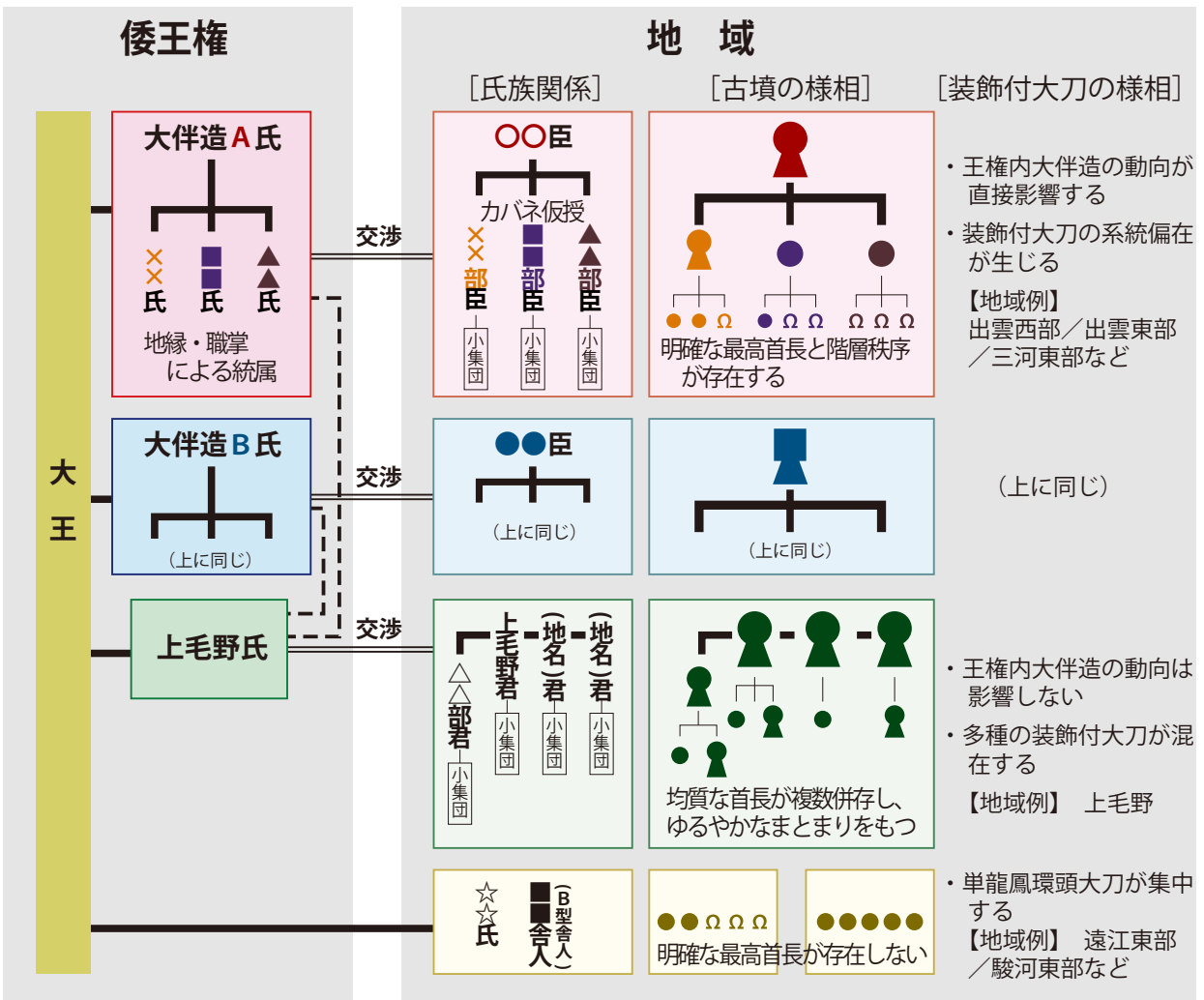


図6 地域の社会構造別に見た、王権との関係の類型

島根県

西暦	時代	日本列島での主な出来事	朝鮮半島での主な出来事
400	古墳前期	<ul style="list-style-type: none"> 百舌鳥、古市古墳群で巨大古墳の造営 	<ul style="list-style-type: none"> 369年 百濟近肖古王、倭に七支刀を送る 391～404年 倭、新羅に侵入するが高句麗に撃退される 414年 高句麗、広開土王碑建立
	古墳中期	<ul style="list-style-type: none"> 425年 倭王讃、宋に入貢 倭の五王が南朝に遣使 471年 稻荷山鉄剣「辛亥年」 478年 倭王武、宋に入貢 	
500		<ul style="list-style-type: none"> 横穴式石室の普及 	<ul style="list-style-type: none"> 475年 百濟、高句麗により漢城陥落、熊津遷都
	古墳後期	<ul style="list-style-type: none"> 527年 筑紫君磐井の乱 534年 武蔵国造の乱 535年 上毛野国に緑野屯倉設置 538年 仏教が伝来 	
600		<ul style="list-style-type: none"> 587年 物部氏本宗家滅亡 596年 飛鳥寺の建立 前方後円墳の築造停止 	<ul style="list-style-type: none"> 513年 百濟、加耶西部侵攻 524年 新羅、加耶東南部侵攻 532年 金官加耶、滅亡 538年 百濟、泗泚遷都 562年 大加耶、新羅に併合加耶諸国、滅亡
	終末期 飛鳥	<ul style="list-style-type: none"> 603年 冠位十二階の制定 645年 大化の改新（乙巳の変） 694年 藤原宮遷都 	

関連年表

第4回 古代歴史文化講演会 資料集

発行年月日 令和元年 12 月 22 日

編集 古代歴史文化協議会事務局（島根県古代文化センター内）

〒690-8502 島根県松江市殿町1番地

TEL：0852-22-6727 FAX：0852-22-6728

発行 古代歴史文化協議会 <http://kodairekibunkyo.jp/>



古墳時代の刀剣は、ヤマト王権と日本列島各地の

有力首長たちとの関係や、倭国と朝鮮半島諸勢力との

壮大な交流を、雄弁に物語る。

刀剣から読み解く、古代国家誕生の実態とは――